



学校法人中越学園

長岡大学

令和3年度 学生による地域活性化プログラム

石川英樹ゼミナール 活動報告書

クイズラリー開催、 SNSによる栃尾PR



02

令和3年度

ごあいさつ



長岡大学 学長 村山 光博

長岡大学の「学生による地域活性化プログラム」は、3、4年次の専門ゼミナールに所属する学生グループが、地域課題の解決や地域の魅力創出に向けた調査研究と具体的な活動を行うことにより、学生の職業人としての基礎的能力向上と地域活性化への貢献を同時に目指すプログラムです。本プログラムは2007（平成19）年度に導入してから、これまで十数年に渡り継続しながら発展してきた本学の特徴的な教育プログラムの一つであります。最近、取り組みの中心でもある地域の現場における学生の諸活動を新聞やテレビ、ラジオ等のメディアでも取り上げていただく機会も増えてきました。また、これまで本プログラムの運営に多大なるご支援ご協力をいただいていた地域連携アドバイザーをはじめ地域の皆様から、これらの取り組みに対する激励のお言葉をいただいております。長きにわたりこの取り組みを続けて来られたのは、ひとえに地域の皆様の暖かいご支援とご指導の賜物と、心より感謝申し上げます。

「地域活性化とは」という問いに対する明確な答えを述べることはなかなか難しいのですが、本プログラムでは、答えのない様々な地域課題に対して、それら課題の原因をどのように捉え、どのように行動を起こして対応していくのかについて、学生が自ら体験することができます。卒業後には地域社会の一員となる学生たちが、将来、各職場や地域コミュニティの中にあるそれぞれの地域課題に取り組むことになる考えると、これらの体験は彼らにとって大変貴重なものとなることでしょう。

本プログラムでは、各ゼミナールで設定したテーマの下で学生グループが活動を進めていくこととなりますが、時には一緒に活動する学生同士のちょっとしたすれ違いや地域の大人たちとの意見の食い違い等も起きることがあります。このような体験も学生がさらに一歩、人として成長するためのきっかけとなります。各グループで決めたテーマをまとめ上げるために、どのように他者と協力しながら取り組みを進めていくべきなのか、このグループの中での私の役割は何か、などを考えながら活動を行っていくことで、グループで活動することの難しさだけでなく、グループで目標に向かって何かをやり遂げることの充実感や達成感を味わうことができます。

長岡大学の「学生による地域活性化プログラム」では、学生が地域に飛び込んで地域の皆様と一緒に汗をかき、楽しみ、そして考える中から、目先の地域貢献活動だけでなく、将来にわたって地域の活性化を担っていく事のできる人材の育成を目指しております。本学の建学の精神は、「幅広い職業人としての人づくりと実学実践教育の推進」と「地域社会に貢献し得る人材の育成」です。本プログラムは、まさにこの精神を実現するための中核となる教育プログラムであると言えます。

本活動報告書は、各取組テーマの調査研究活動の概要とその成果について学生が執筆した報告書を集めて一冊にまとめたものです。ぜひご一読いただければ幸いです。

なお、本プログラムは「NaDeC 構想推進コンソーシアム産学協創ワーキング」から補助をいただいたことを申し添えます。

2022年3月



長岡大学は、文部科学大臣の認証を受けた『公益財団法人日本高等教育評価機構』により、平成28年度大学機関別認証評価を受審し、平成29年3月7日、日本高等教育評価機構が定める大学評価基準を満たしていると「認定」されました。

はじめに

〔PR班〕 クイズラリー開催、SNSによる栃尾PR



長岡大学教授／ゼミ担当教員 石川 英樹

本ゼミナールは令和元（2019）年度に、栃尾地区の活性化をテーマに掲げて活動を開始し、本年度は3年目である。その中でずっと意識されてきた活動の一つの方向性は観光開発である。3年前のゼミ初年度、ゼミ生の一部が「ツアー班」として日帰りの栃尾バスツアーの検討を始め、2年目の昨年度にも目標意識は引き継がれた。新型コロナ感染拡大によりツアー開発は断念されたが、フォトコンテスト開催によりコロナ収束後の本格的な観光開発の活動の基盤固めを目指した。今年度にその流れを引き継いだのが、本報告書を作成した「(栃尾) PR 班」である。

「PR 班」は、コロナ禍が続く今年度、二つの事業に取り組んだ。一つはクイズラリーの開催であり、もう一つはインスタグラム等による栃尾の情報発信の土台作りである。

このうちより多くのエネルギーをつぎ込んだのは、クイズラリーだった。実施要領の検討、参加者を増やす工夫、活動資金の調達、イベント当日の運営など課題は多く、とりわけ夏以降の後期にかなりのハードワークになった。10月下旬に2日間で開催されたクイズラリーでは、400人を超える参加者が栃尾に関するクイズに取り組み、雁木通りのまち歩きを楽しんで下さった。多くの人々に対して、栃尾に触れ、栃尾を知る場を提供できたことは、栃尾PRへの寄与として大いに評価すべきだろう。また、このイベントは「とちお歩く旅のまちづくり委員会」との共催により、伝統ある「雁木あいほ」のクイズラリーとして開催できた。その企画・運営を主導させていただいて成功できたこと自体、大きな成果だと言える。

他方で、インスタグラムによる情報発信プロジェクトはうまくいかなかった。来年度の活動につなげるためにフォロワー獲得を目指したが、その目標を達成できなかった。クイズラリー開催よりも重視されたプロジェクトだっただけに残念である。

しかし、ある意味で、今年度の「PR 班」は3年間で最高の成果を残してくれたと感じている。それは、栃尾で地域おこしの鍵を握る方々との連携を深めて、今後のゼミ活動の土台を築いたことである。10月のクイズラリーは「栃尾縁日」という大きな祭典に加えていただく形で開催されたが、栃尾縁日は栃尾の数々のメジャーなイベントの合同体だった。そこに参画できたことで、ゼミ生は栃尾の様々な地域おこし団体の方々と協働し、存在を認めていただけた。もう一つの班「にぎわい班」も栃尾縁日に参画した点では同じだが、栃尾の方々とより深い関係を築いてくれたのは「PR 班」である。これは、昨年度までの2年間で得られなかった画期的な成果であり、来年度以降の本ゼミの活動の可能性を大いに高めてくれたと強く感じている。本報告書を通じて、その詳細を読み取っていただければ幸いである。

2022年3月

石川英樹
ゼミナール

クイズラリー開催、SNSによる栃尾PR



【参加学生】 8名(4年生5名、3年生3名)

4年 小林真由香 松永優芽 阿部紘輝 王浩田 竹内葵

3年 今井諒 鈴木颯太 諸橋涼

【アドバイザー】

オオタケコウスケ デザイン事務所オフィス 代表 大竹幸輔 氏
長岡市栃尾支所地域振興課 地域おこし協力隊員 加治聖哉 氏

目標： 栃尾地区の交流人口の増加による活性化

(取組 1) ウェブサイト・SNSで栃尾PRのネットワーク構築

(取組 2) 雁木通りでのクイズラリー開催

・来年度以降、コロナ収束後に観光開発の取り組みにおける広報など**情報発信の基盤構築**

・雁木通りまちあるき&栃尾のクイズ…**栃尾の体験型PR**
・SNS (インスタグラム) の**フォロワー増加**の場

フォロワー200人

・「**とちお歩く旅のまちづくり委員会**」と共催：
「**谷内通りで謎解きウォーク～雁木あいぼ～**」開催
参加者 444人



(「栃尾縁日」打ち合わせ)



ALL 栃尾の祭典「**栃尾縁日**」で
共同開催、栃尾の地域活動の諸
団体と協働
……今後のゼミ活動基盤強化

今後に向けて、…

栃尾地区の地域活動団体のデータベース整備。より有機的な域内の組織間連携を促進、栃尾地区活性化を加速。観光開発プロジェクト推進

クイズラリー開催、SNSによる栃尾PR

石川ゼミナールⅢ・Ⅳ（PR班）

18K043 小林 真由香 （リーダー）
18K100 松永 優芽 （副リーダー）
18K006 阿部 紘輝
18K019 王 浩田
18K070 竹内 葵
19K011 今井 諒
19K054 鈴木 颯太
19K105 諸橋 涼

令和4（2022）年1月

目 次

1. はじめに	1
1.1 石川ゼミ PR 班の紹介	1
1.2 活動内容の絞り込み	1
1.3 PR 班の主要な活動	5
2. 栃尾地区の方々との交流拡大	7
3. 取り組み内容の決定	7
3.1 取り組みの方向決定に向けた話し合い	7
3.2 SNS でのネットワークづくり	9
3.3 イベントの決定～フォトラリーからクイズラリーに転換	10
3.4 「栃尾縁日」打合せ～「とちお歩く旅のまちづくり委員会」との出会い	15
3.5 クイズラリーの内容の詰め	16
4. 栃尾高校との高大連携	17
5. 活動資金の調達と賞品・物資の購入	19
5.1 活動資金をいかに確保するか	19
5.2 賞品・参加賞などの物品について	20
5.3 協賛依頼のためのスピーチ	21
5.4 クイズラリー賞品の協賛依頼	22
6. 広報活動	23
6.1 インスタグラムの広報の目標設定～フォロワー数 500	23
6.2 インスタグラムの更新	24
6.3 栃尾タイムス様のご支援	24
6.4 特設ウェブサイトの制作	25
6.5 ポスターの作成	26
7. イベント直前の準備作業	27
7.1 イベント内容の詰めと準備作業を急ぐ	27
7.2 賞品・参加賞の決定と調達	28
7.3 クイズと実施要領の詰め	29
7.4 「あぶらげんしん」の使用を許可いただく	30
7.5 チェックポイントの設定	31
7.6 会場準備	31
8. イベント当日の様子・取り組み	33
8.1 来場者の様子、分担について	33
8.2 クイズラリー中の広報活動	37
8.3 NST 様の取材を受ける	37
8.4 クイズラリーを終えて	38
9. 今後に向けた反省、振り返り	39
9.1 成果と反省点	39
9.2 来年度以降の活動について	40
9.3 終わりに～地域活動組織のデータベース化およびビジネスの視点	41

1. はじめに

1.1 石川ゼミ PR 班の紹介

今年度の石川ゼミ PR 班は、4 年生 5 名、3 年生 3 名の計 8 名で活動した。昨年度「ツアー班」「空き家班」として活動した 4 年生に 3 年生が加わった。当初は、昨年度「ツアー班」が実施したフォトコンテストの応募写真を活用したイベントの開催をイメージして、昨年度フォトコンを企画し運営した 4 年生が中心となって活動を進めた。

今年度も大竹幸輔様にアドバイザーとしてご指導いただけることになった。また、栃尾支所地域振興課ご所属の栃尾地区地域おこし協力隊員の加治聖哉様もゼミのアドバイザーに就任下さり、ご指導いただけることになった。さらに、昨年度までの取り組みに引き続いて、栃尾高校の生徒の皆さんと高大連携の活動を継続することができた（詳細は後述）。

1.2 活動内容の絞り込み

1.2.1 ゼミ活動全体の基本的な方向性の確認

石川ゼミナール全体では、令和元年度以降、栃尾地区の活性化への取り組みを続けてきている。今年度もその枠組みの中での活動方針を検討した。栃尾地区の交流人口を増加させて活性化につながるような活動の検討である。

〔図表 1〕 大竹アドバイザーをお迎えして



4 月、具体的に何に取り組むのかゼミ全体でアイデア出しを行った。各メンバーが取り組みたいと考えるアイデアをまとめてゼミに持ち寄り、全体で発表した。大竹アドバイザーが授業に来て下さり、私たち一人一人のアイデアに対してコメントして下さいました。その過程を経て、①昨年度のフォトコンテスト開催の実績をもとにしたイベントの開催、②ギャラリー白昼堂堂でのイベントの開催、という 2 つの軸にまとまっていった。

そうして「(栃尾) PR 班」と「にぎわい班」とによる分業が決まった。この 2 チームがそれぞれの活動を進め、ゼミ全体として栃尾地区の交流人口の増加の基盤作りを進めていくことになった。私たち「PR 班」8 名は、観光などの面で栃尾の素晴らしさのアピールへの貢献を目標にした。

1.2.2 PR 班の取り組み概要

栃尾には自慢すべき地域資源がたくさんあるが、地域外にはあまり知られていない。栃尾在住者ですら、特に若い世代には地元に関心を持つ人が決して多くはない。そこで、地域内外で栃尾の素晴らしさを知ってもらうため PR に取り組む。それが「PR 班」の具体的な取り組みの基本的な考えである。

私たち「PR 班」の活動では、以下で説明するとおり、Instagram での情報発信とネットワーク作りに注目した。Instagram は若者の利用者数が多く、# で好きなものを探したり見つけたりできる。Instagram で栃尾の魅力を発信することで、栃尾へ行ってみたいと感じてもらい、足を運んでもらうよう広報することが可能である。

私たちは、フォロワー増加を今年度の主要な活動目標にして、目標値も設定した(後述)。新型コロナ禍が収束せず、本格的なツアー開発などの観光的な取り組みができないため、それは来年度以降の活動に託し、その土台になるようなネットワーク構築に焦点を当てることにしたのである。大勢のフォロワーを獲得できれば、今後のツアー企画などの推進で、強力な広報の発信ルートにできる。

フォロワーを増やすには、何らかのイベント開催がフォローのきっかけ作りに有効だと考えた。参加者には、イベントへの参加と同時にフォローしてもらうことができる。そのねらいで開催したのが、10月23、24日のクイズラリーだった。クイズラリーでは、クイズを楽しみながらまち歩きも体験してもらうことで、参加者に栃尾について知ってもらうことも意図した。

昨年度のツアー班が実施した「栃尾中心市街地フォトコンテスト」で応募いただいた写真も最大限に活用したいと考えた。そのため特設ウェブサイトを作成し、フォトコンの写真を使ったバーチャルツアーの仕組みをウェブ上で実現しようとした。コロナ禍で現実のツアー開発はできないが、バーチャルツアーはその代わりにもなる。来年度以降は、そのバーチャルツアーを体験しながら、実際に栃尾をまわるという融合のツアー企画が可能になるかもしれない。

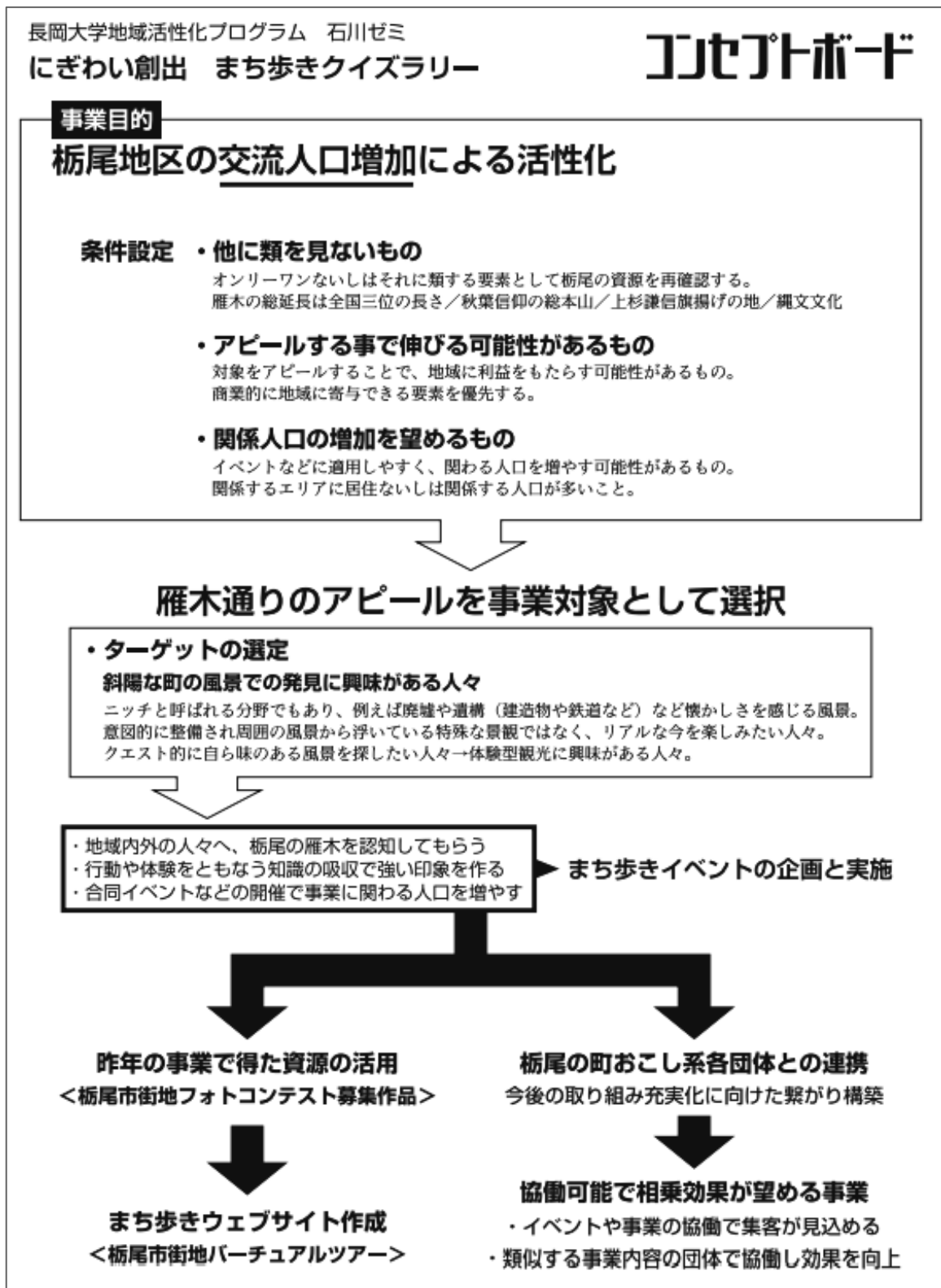
1.2.3 取り組みコンセプトの整理

PR 班では、4月から5月にかけて取り組みの方向を詰めていった。昨年度のフォトコンテストの実績を何らか活用することを意識しながら、その舞台となった雁木通りをアピールするイベントを開催したいという意識もあった。フォトコンテストでは雁木通りを中心とする栃尾の中心市街地を舞台とした。人口減少で寂しくなりつつもしっかりと存在する日常をテーマとしたイベントだった。その成果である写真の活用によって、雁木通りをアピールしようとした昨年度の基本方針の継続を考えた。

その上で、メンバーの話し合いでまず考案されたのは、それらの写真を使って栃尾のまちを巡るフォトラリー開催の企画だった。昨年度の写真を活用できる上に、参加者には実際に栃尾の中を歩くことで栃尾の良さに直接触れてもらうことができる。そうした検討を進めているところで、7月に「栃尾縁日」という大きな祭典の中における他のイベントとの共同開催の話が出てきた。そこでより多くの参加者を獲得しようと考えて、最終的にフォトラリーから変更して、クイズラリーの開催に決定した。10月23日(土)・24日(日)

の「栃尾縁日」での1イベントとして「谷内通りで謎解きウォーク～雁木あいぼ～」となった。そうした今年度の私たちの活動コンセプトを以下の「コンセプトボード」として整理した。

〔図表2〕PR版の今年度活動のコンセプトボード（1）



〔図表 2〕 PR 版の今年度活動のコンセプトボード（2）

実施時期と環境の設定について

条件設定

・他のイベントと共同実施できる機会の模索

協働する事により、集客の相乗効果や各関係者の労力の軽減が見込める。
協働による何らかの効果が測定でき、今後の地域事業のあり方における一つの方向性を示唆する。

・集客が望めるタイミング

コロナ禍においてイベントの減少中のため、地域における価値あるタイミングを模索。
栃尾は 2022 年に新規交流拠点施設が完成するため、その事前事業が開催され、それらを狙う。

・既存のイベントのブラッシュアップとなる

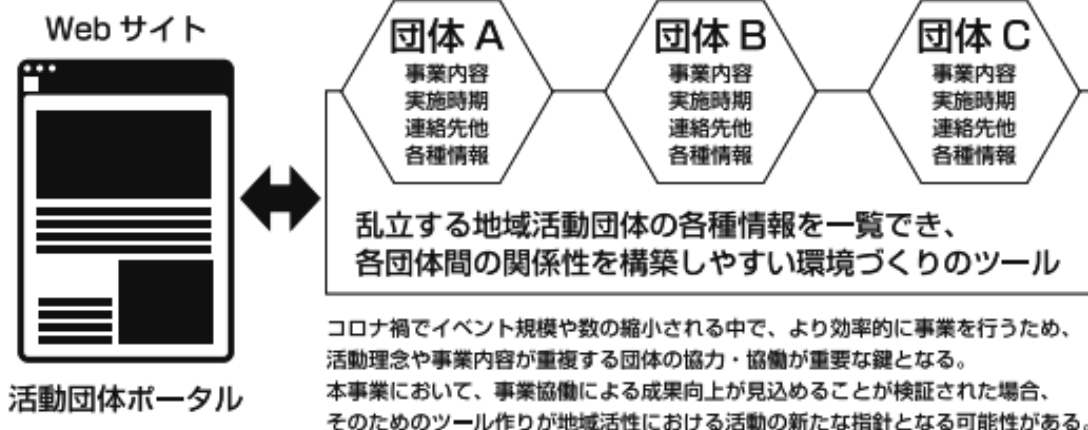
全くの新規イベントを考案する事は事業の検証になりにくいいため既存のイベントへ協働する。
中心市街地を対象とする事で、ある程度狭いエリアに限定し、来訪者との触れ合いの機会を増やす。

10月23・24日「栃尾縁日」での協働

「とちお歩く旅のまちづくり委員会」 雁木あいぼ

- ・過去の積み重ねによるノウハウを教授してもえる
- ・SNS の活用など新たなアイデアを提示する
- ・ウェブサイトの制作によりイベントのみで終わらないアイデアの提示
- ・クイズラリーの問題などで外部の若い視点による新たな切り口

多様な団体と協働事業による集客力のアップの検証



1.3 PR 班の主要な活動

私たち石川ゼミ PR 班が取り組んだ今年度の活動を大まかにまとめたものを下記の表に記した。各取り組みの詳細は後述する。

〔図表 3〕 2021 年度の石川ゼミ PR 班での活動（12 月のインスタグラム抽選会まで）

活動時期	活動内容
4～5月	・ゼミ全体で取り組みについて話し合い。フォトコンテストで応募していただいた写真の活用方法、企画のアイデア出し等。
6月	・イベントのチェックポイント、開催期間等の検討。
	・PR 班メンバー全員で今年度初の栃尾地域でのフィールドワーク実施。SNS 用の写真撮影。
	・インスタグラムの投稿開始。
7月	・クイズ作成のためフィールドワークを行う。
	・栃尾商工会へヒアリング。「栃尾縁日」の情報を得る。
	・栃尾文化センターにて「栃尾縁日」打ち合わせに参加。
8月	・栃尾観光協会へヒアリング。
	・谷内通りの視察。
	・「とちお歩く旅のまちづくり委員会」西片様と打ち合わせ。
9月	・栃尾高校との共同授業（zoom、対面の計 2 回）クイズや景品について話し合う。
	・西片様と打ち合わせ。
	・アドバイザー大竹様事務所でウェブサイト、イベント内容について話し合い。
	・NST 様の取材（大学での授業）。
10月	・西片様とクイズの検討。
	・「栃尾縁日」打ち合わせに参加。
	・栃尾ロータリークラブ、栃尾ライオンズクラブへ協賛のお願いに伺う。
	・米与米穀店へ協賛のお願いに伺う。
	・イベントのチェックポイントのクイズパネル、解答用紙等の作成。
	・インスタグラムで銘菓プレゼント企画開始。（12 月 7 日抽選）
	・クイズラリー開催。（10 月 23, 24 日）
11月	・「栃尾縁日」打ち合わせに参加。
12月	・インスタグラム抽選。商品発送。

以上の活動内容においては、栃尾を知りまた栃尾の方々との交流を深めるために、私たちは可能な限り栃尾地区へ出向いた。授業時間以外でのフィールドワークに力を入れた。私たちのフィールドワークの実績は次ページのとおりである。

〔図表4〕2021年度の石川ゼミPR班のフィールドワークの記録

no.	日付	場所・内容	出張者
1	2021/6/11	栃尾地区の各ポイント視察	阿部、王、小林、竹内、松永、今井、鈴木、諸橋
2	2021/7/9	栃尾地区視察（クイズラリー・アイデア収集）	阿部、小林、竹内、松永、今井、鈴木、
3	2021/7/14	栃尾商工会ヒアリング	阿部、小林、竹内、松永、今井、鈴木、
4	2021/7/30	栃尾文化センターで「栃尾縁日」の打ち合わせ参加	小林、諸橋
5	2021/8/10	栃尾観光協会ヒアリング	阿部、小林、今井、鈴木、諸橋
6	2021/8/11	「とちパル」で「とちお歩く旅のまちづくり委員会」西片様との打合せ	小林
7	2021/8/18	栃尾谷内通りでのクイズ・ラリー素材探索	阿部、小林、松永、諸橋
8	2021/9/7	栃尾高校とのZOOMでの共同授業	阿部、王、小林、竹内、松永、今井、鈴木、諸橋
9	2021/9/9	アドバイザー大竹様オフィスでの特設ウェブサイト設計の打合せ	小林、松永
10	2021/9/10	「とちパル」で「とちお歩く旅のまちづくり委員会」西片様との打合せ	竹内、今井、鈴木
11	2021/9/10	白昼堂で加治アドバイザーと打合せ、白昼堂の整備ボランティア	竹内、今井、鈴木
12	2021/9/15	栃尾商工会で事務局長武士侯様、にぎわい委員会広野様と打合せ	小林
13	2021/9/21	栃尾高校と共同授業	阿部、王、小林、竹内、今井、鈴木、諸橋
14	2021/10/1	「とちパル」で「とちお歩く旅のまちづくり委員会」西片様との打合せ	小林
15	2021/10/4	栃尾谷内通り商店街でクイズ・ラリーへの協力依頼、米与米穀店に協賛依頼	小林、松永
16	2021/10/5	栃尾ロータリークラブ定例会で協賛依頼	小林、竹内
17	2021/10/5	栃尾文化センターで「栃尾縁日」の打ち合わせ参加	小林
18	2021/10/6	栃尾ライオンズクラブ定例会で協賛依頼	小林
19	2021/10/7	谷内通商店街でクイズラリーへのご協力依頼	鈴木
20	2021/10/14	栃尾道の駅ハーモニーで賞品購入	鈴木
21	2021/10/15	栃尾文化センターで「栃尾縁日」の打ち合わせ参加	小林
22	2021/10/18	栃尾道の駅ハーモニーで賞品購入	鈴木
23	2021/10/23	「栃尾縁日」初日・クイズラリー開催	阿部、王、小林、竹内、松永、今井、鈴木、諸橋
24	2021/10/24	「栃尾縁日」二日目・クイズラリー開催	阿部、王、小林、竹内、松永、今井、鈴木、諸橋
25	2021/10/28	栃尾道の駅ハーモニーで精算	鈴木
26	2021/11/16	栃尾文化センターで「栃尾縁日」の振り返りの打ち合わせ参加	小林

2. 栃尾地区の方々との交流拡大

今年度の私たちの活動では、栃尾地区の多くの方々や諸団体に大変お世話になるとともに、そのの方々との連携を深めることができた。これは、昨年度までの活動では到達できなかった貴重な成果である。

なかでも、ALL 栃尾で開催された「栃尾縁日」(後述)は、私たちにとって決定的に重要な場になった。栃尾商工会事務局長の武士侯様には、栃尾縁日の企画に関する情報をいただき大いに支援いただいた。その「栃尾縁日」では、栃尾支所地域振興課・商工観光課、トチオノアカリ協議会、とちおにぎわい委員会、栃尾青年会議所、栃尾観光協会など様々な団体とコラボさせていただき、多くのアドバイスとご支援をいただいた。中でも、クイズラリーを共催させていただいた「とちお歩く旅のまちづくり委員会」の西片様と広野様には大いに助けていただいた。イベント開催までに何度も伺い、相談させていただいた。

これらの方々は、栃尾地区の活性化に情熱を持って取り組まれ栃尾活性化の鍵を握っておられる人々である。そうしたの方々とのネットワークは、今後の石川ゼミの活動にとって非常に重要な基盤になると思う。これは、今年度の私たちの活動の最大の成果だと言っても良いだろう。来年度以降に、このつながりをもとにして、栃尾地区の地域おこし活動団体のデータベース化に取り組んでいくべきである。

そうした貴重な成果を得ることができた本年度の取り組みの詳細について、以下で説明する。

〔図表5〕 お世話になったの方々との写真(11月「栃尾縁日」打ち合わせで)



(執筆担当) 小林 真由香

3. 取り組み内容の決定

3.1 取り組みの方向決定に向けた話し合い

今年度私たちはクイズラリーの開催に取り組んだ。しかし、その活動に至るまでには紆余曲折があった。私たちのイベント開催がクイズラリーに決定されるまでの経緯を以下で解説する。

今年度は昨年度のようなコロナ感染症対応での大学閉鎖はなかったことなどから、早期に活動を開始できた。4月にゼミ全体でPR班とにぎわい班の2つのグループ分けが決ま

った後に、5月の連休明け頃までの間、私たちは何に取り組むかを詰めていった。

その頃は班の全体として前年度のフォトコンテストに何らか関わった活動の意識が強かった。とはいえ、具体的なアイデアがほとんどまとまっていなかったことから、5月18日のゼミでは各メンバーがそれまでに考えてきたアイデアをもとに、下記①②に絞って検討した。

①今年も昨年度同様にフォトコンテストを継続していくか

②フォトコンテスト以外で取り組みたい活動はないか

①については、以下のアイデアが出た。

- ・昨年度と同様にフォトコンテスト 2021 を開催する。
- ・栃尾中心市街地だけではなく対象範囲を拡大したフォトコンテストを開催する。
- ・単なるフォトコンテストではなく、ゲーム性を持たせたフォトラリーを開催する。

二つ目の対象範囲拡大によるフォトコンのアイデアは、昨年度の発展型である。昨年度の経験を活かし、さらには中心市街地以外の栃尾の良さもアピールできるという考えからの提案だった。三つ目のアイデアは、フォトラリーというゲーム性を持たせたフォトコンテストで、興味深い提案だと感じられた。

②については、以下のアイデアが出た。

- ・栃尾紹介の特設ウェブサイトを開設する。
- ・栃尾マップを作成する。
- ・商品開発にチャレンジする。

このうち、栃尾紹介の特設ウェブサイトと栃尾マップ作成の案は、昨年度のフォトコンテストの応募作品の活用を意識した提案だった。

これらのアイデアをもとにして詰めていった結果、以下の4つの企画案に整理された。

(1) フォトラリーの開催

参加者が昨年度のフォトコンテストの応募作品が撮影された場所を巡るゲームである。その写真と同じ場所で参加者が写真を撮影して、その写真を私たち事務局に見せることによりポイントを獲得する。栃尾の伝統的なまち歩きイベント「雁木あいぼ」的なイベントにもなる。参加者は獲得したポイントを賞品と交換する。賞品は栃尾のお米、野菜、あぶらげなどにして、栃尾のPRにつなぐ。

(2) 栃尾紹介の特設ウェブサイト創設と運営

昨年度のフォトコンテストのPRのために創設されたウェブサイトを、栃尾全般のPRのための特設サイトとしてリニューアルし拡張する。コンテンツとしては、昨年度のフォトコンテストの応募写真に加えて、ゼミ生が新たに撮影した動画や栃尾紹介のエッセイなどを掲載し、バーチャルツアーが楽しめるサイトを構築する。

(3) 栃尾マップの作成

栃尾地区の名所を紹介する資料として、昨年度のフォトコンテストの応募写真を活用したマップを作成する。ゼミ生が新規撮影した写真も加えて、よりビジュアル的なマップにして、地域外の人に栃尾の良さを伝える資料とする。ただし、公式に制作されている栃尾

マップは少なくとも3種類あり、既に道の駅などで配布されている。それらとの差別化をどのように行っていくかが大きな課題になる。

(4) 商品開発

お土産などとして栃尾のPRにつなげるための何らかの商品を開発する。昨年度のゼミ活動で「商品開発班」は裂き織りによって繊維を使った商品企画にチャレンジしたが、それを発展させる。

上記の企画案とそれ以外のディスカッションで出てきていた意見なども含めて、大竹アドバイザーにご指導いただくことにした。それぞれの案が抱える課題を指摘いただくとともに、詳細な計画作成に向けたアドバイスをいただいた。

その結果、栃尾マップの制作については新規性を打ち出すのは難しく、また商品開発は昨年度の経験から実現可能性が低いことを確認した。それらの課題を打破することは容易ではないという結論になり、上記の案のうち、フォトラリーと特設ウェブサイトのアイデアを中心に具体化していくという方向に収束していった。

また大竹アドバイザーは、特設ウェブサイトの創設について、全員で分担するのではなく少数の担当者が作業する形が進め方として効率よく適切だとアドバイスして下さった。そうして、4年松永を中心にアドバイザーとも相談しながらウェブサイトの作業を進めることになった。

クイズラリーについては引き続き、全体で詰めていくことにした。

3.2 SNSでのネットワークづくり

ゼミでは6月以降もフォトラリーの詳細を詰める話し合いを続けた。メンバー全員で栃尾を盛り上げるためには、どのような活動が良いか話し合った。

話し合いの中で、それまでの大竹アドバイザーと加治アドバイザーからのご指導も踏まえて、今一度私たちPR班の今年度の活動の方向性を再確認した。その結果、確定した内容は以下の2つである。

① 栃尾の魅力を伝える SNS・ウェブサイト構築を今年度の取り組みの中心に位置づける

栃尾の自然や史跡など地域資源の素晴らしさを伝えるウェブサイト・SNSアカウントの創設と充実である。本来的に栃尾地区の本格的なPRには、単なるイベントの開催では弱い。コロナ禍収束後には観光開発まで踏み込んでいくべきである。そうした来年度以降の活動につなげていくには、イベント開催のみに注力するのではなく、来年度も活用できる土台づくりが有意義である。一例が、今後もPRに活用できるウェブサイトやSNS制作である。SNSのインスタグラムで多くのフォロワーを獲得できれば、そのつながりを使って、来年度以降の事業展開で勝負できるであろう。そのためにも、SNSの魅力を高めて注目度を上げていきたい。

② SNSフォロワーとウェブ閲覧者を増やすきっかけ作りとしてのイベント開催

イベント参加者に対面で直接SNSをフォローしてもらうよう誘導できれば、SNSフォロワーのネットワークが拡大して、その分来年度以降の本格的な栃尾PR事業の可能性に

つながっていく。イベント参加者のみならず、その他の広報手段も使ってフォロワーを拡大していく。フォロワー数がどのように推移したか、特にイベントの開催によってどの程度テコ入れできたかをしっかり把握して、取り組みの成果を検証する必要がある。

以上のとおり、SNS等のネットワークづくりをメインとして、フォトラリーをその実現手段に位置づける姿勢を明確にした。そうしてPR班内で満場一致で今年度は栃尾の魅力を伝えるSNSとウェブサイトでのネットワーク作りを行っていくことにした。

3.3 イベントの決定～フォトラリーからクイズラリーに転換

3.3.1 クイズラリーに決定

私たちは、SNSのフォロワー増を目指すという基本目標のもとで、フォトラリーの内容に関して再度検討することにした。

その中で、フォトラリーでは、確かに昨年度のフォトコンテスト応募作品を活用できるが、より直接的に栃尾を知ってもらうには写真を趣味にしない子どもからお年寄りまでが広く楽しめるクイズラリーが良い、というアイデアが出た。幅広い層にSNSをフォローしてもらう点からも、クイズラリーが適切だという考えでゼミ内が一致した。

こうしてイベントはクイズラリーに決まった。しかし具体的な実施要領やメニューなどの詳細を詰めていかなければならない。フォトラリーであれば、昨年度のフォトコンテストの写真を活用できたが、クイズラリーは全く新たな取り組みで何も土台がない。そのスタートとして、まずは現地視察に取り組むことにした。

3.3.2 現地フィールドワークとその後の議論

6月11日、私たちは全員で栃尾地区へフィールドワークに出かけた。クイズラリーを実施する上で、クイズ素材になりそうなスポットを視察するためである。それ以前にゼミの授業中にスポットになりそうな候補地点の案を出し合って、最終的に6カ所を選んでいった。当日は、全メンバー8人が3台の車に分乗してその6カ所をまわった。

訪問地は以下のとおりである。

- (1)谷内（やち）通り：長岡市谷内2丁目
- (2)秋葉神社・秋葉公園：長岡市谷内2丁目
- (3)中央公園：長岡市中央公園
- (4)栃尾大神宮：長岡市栃尾大町4-5
- (5)中山神社：長岡市栄町1-447
- (6)栃尾城跡：長岡市栃尾町729番地

このフィールドワーク前には栃尾に行ったことのなかったゼミ生もいたことから、今後より適切な議論を進める上でも、全員が栃尾のイメージをつかむために貴重な出張になったと思う。

〔図表 6〕メンバー全員で栃尾視察（2021/6/11）
（栃尾 大野口駐車場で打合せ）



（栃尾城趾）



以上のフィールドワークで、クイズラリーで題材とすべき場所についての感覚を共有し、クイズラリー参加者にまわってもらうべき場所を詰める相談をした。その中では、クイズラリーでまわってもらう地点が離れすぎているのは問題ではないか、という意見も出た。これは、後にアドバイザーからも指摘いただいた点である。

子どもからお年寄りまで多様な人々に大勢参加してもらうには、移動手段に配慮する必要がある。全ての参加者が自動車で参加するとは限らないからである。ただしこの時点では、栃尾の名所をたくさん見てもらいたいという考えから、クイズラリーの範囲を栃尾地区内全域で広く設定し、数日間かけてまわってもらうことが可能なイベントにするイメージを抱いていた。さらに、谷内通りなどのまちなかのチェックポイントでQRコードを探して、各QRコードを見てクイズを読み、そのヒントがある郊外の名所に出かけて答えを考える、という形式を考えていた。参考として、この頃にゼミで議論したクイズラリーの初期の企画案を次ページに示した。

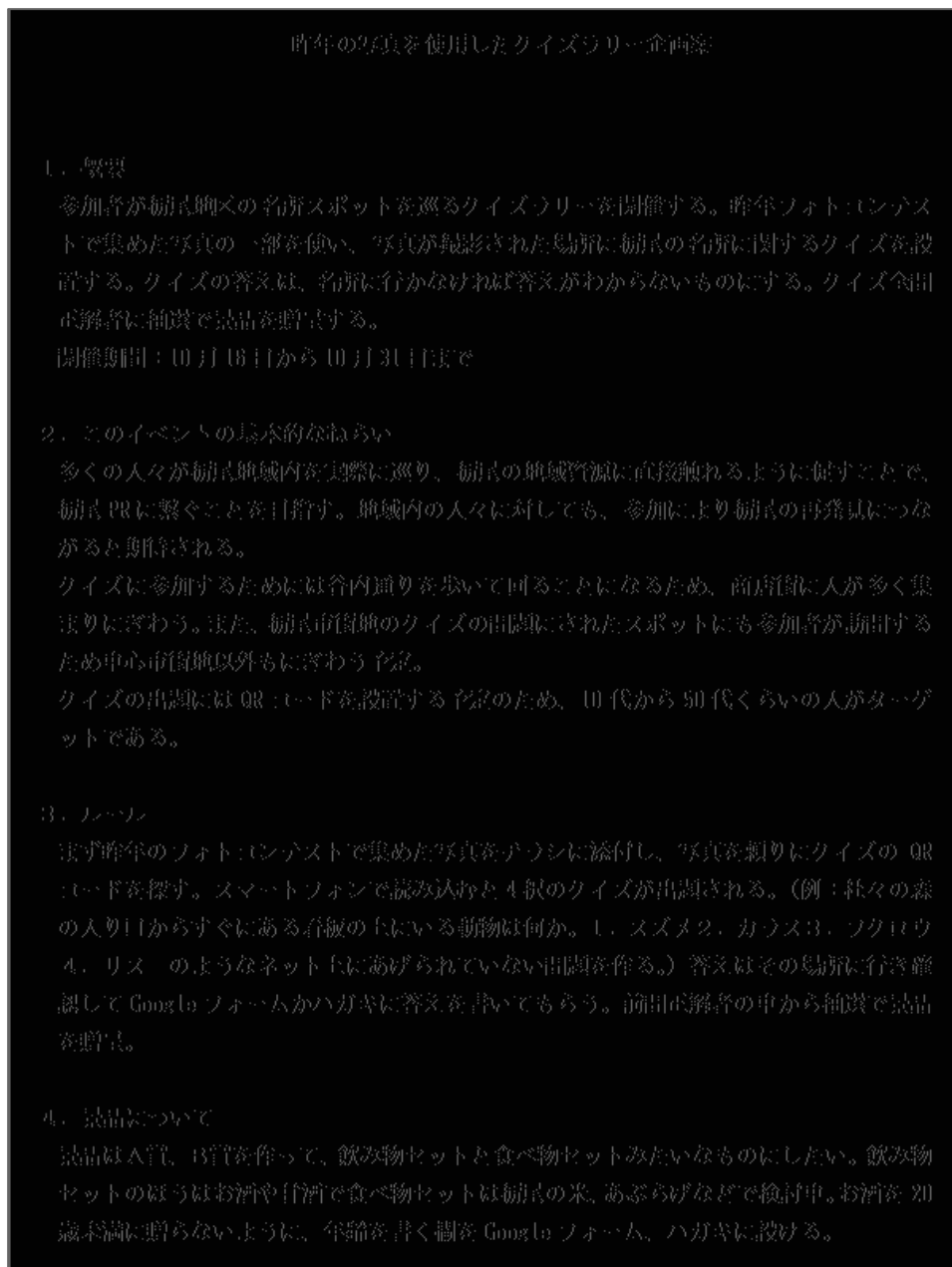
7月9日にはフィールドワーク第二弾として、具体的なクイズを考えることを目的に、あらためて栃尾の名所を数カ所訪れた。この日の訪問場所も6カ所だったが、前回のフィールドワークも踏まえて、クイズラリーのスポットとしてより現実的な場所の検討をゼミ内で進め、その結果選ばれた場所だった。4年阿部、小林、竹内、松永、3年今井、鈴木の6名が3つのペアを組んで、2カ所ずつ計6カ所を訪問した。

訪問場所は以下のとおりである。

- ・阿部、竹内：諏訪神社（栃尾表町 2-2）、羽黒神社（栃尾表町 3-3）
- ・今井、鈴木：巢守神社（栃堀 2768）、道の駅（栃尾宮沢 1764）
- ・小林、松永：菅原神社（来伝 2699）、フィッシングパーク（栃堀 字駒沢 6044）

あいにくの強い雨でフィールドワークは難航したが、メンバーは各訪問場所でのクイズ案を作成し共有できた（図表 8 を参照）。

〔図表 7〕ゼミで検討したクイズラリーの初期企画案（2021/7/9）



〔図表 8〕7/9のフィールドワークで作成したクイズ案から（抜粋）

<p>東守神社には入って左手に二つの記念碑がありますが、左の記念碑を作った新潟県知事は誰でしょうか？</p> <p>1. 塚田十一郎 2. 君健男 3. 金子清 4. 花角英世 答え 2</p> <p>道の駅とちおの問題 道の駅栃尾のレストランの受付の上に飾ってあるものは何でしょう？</p> <p>1. 油揚げの絵 2. 栃尾市内の写真 3. 栃尾マップ 4. たこ 答え 4</p>

〔図表 9〕 クイズ案作りのための栃尾フィールドワーク（2021/7/9）

（諏訪神社）



（巢守神社）



3.3.3 栃尾商工会でのヒアリング

以上の活動でクイズラリーの検討は進めたが、私たちが検討中のクイズラリーで果たして参加者が集まるのか、また参加者を集めるための広報はどうすれば良いかなどについて、様々な方から意見をいただくべきだと考えた。

〔図表 10〕 栃尾商工会での打ち合わせ（2021/7/14）



そこで、7月14日に栃尾商工会へ4年阿部、小林、竹内、松永の4名が訪問した。私たちが検討中のクイズラリーの概要をご説明した上で、その印象をお聞きした。事務局長の武士侯様、経営支援室の田巻様をご対応下さり、様々なアドバイスを下さった。ポイントは以下のとおりである。

- ・参加者視点から考えると、賞品がよっぽど魅力的であれば別だが、このクイズラリーにはなかなか参加してもらえないだろう。
- ・しかも、まちなかでQRコードを探し、さらに各QRコードを見て郊外の名所に出かけるというのは参加者の負担が大きすぎる。まちなかだけで完結させるか、もしくは郊外の名所に直接出向かせるクイズラリーにするか、どちらかにすべきである。
- ・人集めに固執するのではなく、クイズラリーの目的を再検討してはどうだろうか。「栃尾で売り出したい場所」にまつわるクイズを出すイベントにしても良い。
- ・栃尾城を「覇道の鐘」なども含めて「謙信公旗揚げの城」として売り出そうとする計画がある。また、秋葉神社は全国の秋葉信仰の総本山としてPRすべきだという意見

も強い。これらの場所について、背景の歴史的ストーリー性を付けたクイズを出して、参加者に学んでもらうように誘導するのも一つのアイデアである。

- ・そうした目的のイベントなら、たとえ今回参加者が少なかったとしても今後につながる。栃尾の歴史的・文化的な面をPRをしていく第一歩になり、来年度以降、今回のクイズで準備した内容を使ったパンフレットの制作等に取り組んでも良い。
- ・栃尾の人々は、歴史的・文化的な地元の地域資源への関心が薄く、宝の持ち腐れになっているようにも感じるので、その意識を変えていくようなイベントも期待している。

3.3.4 「栃尾縁日」の開催計画の情報をいただく

さらに、武士侯様、田巻様は、今年度の私たちのゼミ活動にとって最重要な情報をくださった。10月23日・24日に大きなお祭りの計画が立ち上がっているという情報である。後に「栃尾縁日」として開催されることになるそのお祭りの計画に、私たちが初めて接することができた。

もともと栃尾には多くのお祭りイベントがある。しかし、新型コロナがなかなか収束せず、前年度からほとんどの祭・イベントは中止されてきた（今年度の4/12大名行列、7/24火祭り、謙信公行列なども中止）。それに対して、10/23・24には久々の大規模なイベントが計画されているというのである。

例年、とちお道の駅で開催される「農業まつり」という2万人程度の来場者がある栃尾最大のイベントをはじめ、トチオノアカリ、栃尾手鞠祭り、雁木あいぼ等のそうそうたるイベントが合同で開催される可能性があるとのことのお話だった（後日、農業まつりは中止になった）。メイン会場は谷内通りで、当日は歩行者天国になるようだとのことだった。さらに詳しい情報は、長岡市栃尾支所の地域振興課の武士侯様に何うと良いとのことのお話もいただけた。

そうして、私たちのクイズラリーも、その日程に合わせてまちなかで開催すれば、大勢の方々に参加してもらえるかもしれないとアドバイスくださった。

これは、私たちにとって大変重要な情報だった。さっそくゼミ授業ではにぎわい班も含めてゼミ全体でこの情報を共有して相談した。その結果、集客の大きなチャンスと考え、「栃尾縁日」にあわせて、10月23日（土）・24日（日）にクイズラリーを開催することにして、それに間に合うように検討と準備を進めることにした。

〔図表 11〕 栃尾観光協会様を訪問



また栃尾商工会では、私たちのイベント開催の意向を栃尾観光協会様にもお知らせしておくが良い、とアドバイスをいただいた。今後の広報や協賛関連で支援していただけるだろうと話された。

栃尾観光協会様には、昨年度のフォトコンで協賛金を提供いただくなど大変お世話になりながら、様々なご連絡が遅れてしまい大変な失礼をしてしまったという経緯があった。お盆休み前の8月10日に栃尾観光協会へゼミ生5名で訪問させていただいた。対応下さった島様に、クイズラリーを開催予定であることをご報告するとともに、その広報手段についてご相談させていただいた。島様はご協力を快諾下さった。

3.4 「栃尾縁日」打合せ～「とちお歩く旅のまちづくり委員会」との出会い

栃尾商工会訪問後に、事務局長武士俣様から7月30日夜に10/23・24のイベントに関する会合が開催されるとの情報をいただいた。にぎわい班の代表メンバーと一緒に4年小林と3年諸橋の2名が会議へ参加させていただくことにした。

栃尾文化センターで夜7時から開催された会議には、栃尾支所の地域振興課の方々による準備のもとで、日々栃尾の地域おこしに尽力されている様々な団体の方々が集まっていた。用意された各団体の配布資料をもとに、全体を統括されたトチオノアカリ協議会の西片吉邦様の進行により打ち合わせが進められた。

会議が進むにつれて、10/23・24の大規模な祭典（仮称：栃尾秋祭り）の構想全貌が私たちにもつかめてきた。会議前に、私たちもクイズラリーを同時開催する意向であることを事務局の方々にお伝えしており、会議当日にはにぎわい班と共同で資料を持参し配布してその概要をみなさんに発表した。会議に参加された皆さんは、私たちゼミ生のイベント共催を大歓迎して下さいました。

この会議の中で、広野様、西方光範様の「とちお歩く旅のまちづくり委員会」という団体が「雁木あいぼ」というクイズラリーを栃尾縁日の一部として開催を予定されていることを知った。「雁木あいぼ」とは、栃尾の人々は誰もが知る伝統的なまち歩きの記事で、近年はクイズラリー形式で毎年実施されていたものである。

〔図表 12〕 栃尾文化センターでの会議



〔図表 13〕 会議後に共催の相談 (2021/7/30)



私たちは、共同開催により素晴らしいクイズラリーが開催できるのではないかと考えた。早速、全体の会議終了後に広野様、西方様に声を掛けさせていただいてご相談した。その結果、雁木あいぼを私たちの若い力でパワーアップして欲しい、とありがたいお言葉をいただくことができた。大学生の主導により開催してはどうかと、共催を決めていただいた。こうして、「長岡大学×とちお歩く旅のまちづくり委員会」による雁木あいぼクイズラリーが始動することになった。

この結果、急いで計画を見直す必要が出てきた。もともと「雁木あいぼ」は谷内通り近辺のみでの開催が想定されており、さらに小学生や子連れの親子をメイン・ターゲットとするイベントであることから、それらを基本とする方針をゼミで確認した。

3.5 クイズラリーの内容の詰め

以上のように、「とちお歩く旅のまちづくり委員会」とのクイズラリーの共催が決まったことから、同委員会の西片様との相談を進めた。

〔図表 14〕 とちパルで西片様と打ち合わせ



9月、10月にとちパルで西片様とお会いし、イベントの進め方全般を始め、クイズ案やチェックポイント案などを詰めた。西片様は、過去の雁木あいぼクイズラリーの資料をご提供下さるとともに、そのポイント等をご指導下さった。また、過去の「雁木あいぼ」の参加者の雰囲気や数の実績も教えて下さった。この話し合いの中で、正式なイベント名を、「谷内通りで謎解きウォーク～雁木あいぼ～」に決定した。

基本的なその準備体制としては、イベントのルールなどの詳細、クイズ案、チェックポイント、賞品、当日の会場準備の段取りなどの全般の素案を私たちが作成して、西片様に随時ご報告してご指導いただく、という流れで進めていった。

西片様は、私たちのアイデア主導での企画にお任せ下さった。その中で、過去の雁木あいぼでは参加者に対して受付ですべてのクイズと各チェックポイントが印刷された用紙を配布するというスタイルで実施されていたのに対して、私たちは受付では最初のチェックポイントだけを参加者に伝え、各チェックポイントでクイズとその次のチェックポイントを示すという方式を提案した。それに対して西片様は、これまで未経験な形式だが楽しそうですねと賛同下さった。

〔図表 15〕「とちお歩く旅のまちづくり委員会」西片様からいただいた過去の雁木あいぼ資料

第16回
とちお歩き解き所めぐり雁木あいぼ
 令和元年5月3日(金・祝) 午前10時～午後4時
 ↓ **なぜ解きスタート!** (応募者全員に商品をプレゼントします!)

※「あいぼ」とは一般に「歩こう」という意味です。

<p>① 茶臼寺本堂「てまりまつり」の会場で雁木あいぼ用に飾られているてまりの模様は何でしょう? a. さく b. 松竹梅 c. 稲穂 ヒント: 茶臼寺</p> <p>② マップ内の本町フェスティバル会場に立っているのぼり旗で関連しているものがあります。それはどれ? a. ① b. ② c. ③ ヒント: 本町 諏訪神社</p> <p>③ 西谷川右岸のけやき通りの歩道沿いには何本のけやきがあるでしょう? a. 50本 b. 52本 c. 54本 ヒント: 天赤橋～新金橋</p> <p>④ ツバメの鳥作りには数滴な雁木通りですが、ツバメの巣が一番多い雁木通りはどこを通りでしょう? a. 新内～本町 b. 天町～新町 c. 堤の下町～新町 ヒント: マップ②(新町区民会館)</p> <p>⑤ 天町の越鉄屋さんは、かつて2つの会社が合併してできました。ひとつは山家屋、もうひとつは? a. 越屋屋 b. 越屋屋 c. 山家屋 ヒント: 越鉄屋さん入口看板</p> <p>⑥ 西谷川に空かる風光明媚な景色が楽しめる神明橋は何年に造られた? a. 昭和26年 b. 昭和36年 c. 昭和46年 ヒント: 神明橋らんかん</p>	<p>⑦ 雁木プロジェクトによって平成16年に復元通りに造られた雁木の名前は? a. 復元の雁木 b. おどりの雁木 c. 村福の雁木 ヒント: 雁木の駅・城山通り口</p> <p>⑧ とちおの特産ヒーロー、トチオンガーセブンが秋葉公園で眠っている怪人の名は? a. 天狗獣人 b. グドロン c. ヤマキノオロチ ヒント: 秋葉公園</p> <p>⑨ 秋葉美術館は複製画メートルの高さにある? a. 128.7m b. 118.7m c. 108.7m ヒント: 秋葉美術館</p> <p>⑩ 足裏チェックで足の診断なども行う雁町の「かしいでや」さんの店先に展示している骨の複製は何? a. 空骨 b. 若足 c. 両足 ヒント: かしいでやさん</p> <p>◆安全に注意して町めぐりを楽しみましょう! ◆ヒントの場所がわからなかったり、送ってしまった時にはおの人に聞いてみよう。 ◆なぜ解きの答え合わせは、とちお歩きの本場でお願いします。 ◆0問以上回答した人には、もちろんオリジナル商品をプレゼント! さらに、応募者の中から抽選でとちおグッズを、後日お届けします。</p> <p>あなたは、いくつ解けるかな?</p>
--	--

このように、とちお歩く旅のまちづくり委員会との共催体制を土台としながら、とちおにぎわい委員会、栃尾商工会、栃尾縁日会議、栃尾観光協会などとの連携により内容をすり合わせながら準備と検討を進めていった。

(執筆担当) 阿部 紘輝

4. 栃尾高校との高大連携

昨年度は栃尾高校との協働によりフォトコンテストを企画し実施できた。それに続いて、今年度も私たちは栃尾高校と協力して活動させていただきたいと考えた。しかし、年度の初めから夏にかけて、コロナ感染の拡大が収まらず、県内の特別警戒態勢などもあって、高大と一緒に活動する計画を立てることが難しかった。そうした中で、ようやく大学の夏休み中の9月7日に栃尾高校を訪問して共同授業が実施できることになった。それまでに、

大学でクイズ案を考えて、当日に発表し取り組んでもらうことにした。

しかし、8月後半からコロナ感染拡大が加速し県内で特別警報が発令されたため、栃尾高校での共同授業は不可能になった。それでも、栃尾高校の桑原先生のご尽力により、ZOOMで高大をつないだ共同授業が実現した。授業では、最初に4年小林がクイズラリーの企画概要を説明して協力をお願いをした後に、それまでに私たちが考えたクイズ案をお伝えして、高校生の皆さんにチャレンジしてもらい、感想やコメントをもらった。

〔図表 16〕 ZOOMによる栃尾高校との共同授業とその後の大竹アドバイザーのご指導（2021/9/7）



ZOOM 授業が終了した後に、大竹アドバイザーが来学されご指導いただくことができました。今後の進め方全般とイベント広報についてアドバイスを下さった。とりわけ、今年度の重要な取り組みである SNS の魅力向上のために、より積極的に活動するようにご指示いただいた。

9月21日には、栃尾高校で二回目の共同授業が実現できた。にぎわい班とともに栃尾高校を訪問して、私たちは10名の高校生とグループワークを実施した。栃尾縁日でのイベント開催まで残りひと月程度になっていたことから、クイズ案の検討に加えて、参加者への賞品案、クイズラリーのチェックポイント案についても相談した。このときは栃高生の皆さんもクイズ案を用意して下さっていた。結果として、その一部を本番のクイズとして活用させていただくことができました。

〔図表 17〕 栃尾高校での共同授業（第二回目：2021/9/21）



（執筆担当）王 浩田

5. 活動資金の調達と賞品・物資の購入

5.1 活動資金をいかに確保するか

クイズラリーの開催には、賞品や必要資材を購入するために資金が必要だった。大学予算では負担できないため、私たち自身の力で何とか調達する必要がある。

この点について、私たちは既に7月14日の栃尾商工会ヒアリングにおいて、武士侯様にご相談しており、それに対して以下のようなアドバイスをいただいていた。

- ・協賛金や賞品としての商品提供のお願いは、大学生の皆さんにぜひ頑張って挑戦して欲しい。そうした現場で学べることは大きく、社会人で必要な力を醸成する良い機会になる。地域の人々は、若い大学生が頑張ってくれるのを見れば、できる限りサポートしたいと考えて下さると思う。
- ・昨年度のフォトコンのように、栃尾ライオンズクラブ、栃尾ロータリークラブ、谷内商店会会長等に対するご協力依頼にチャレンジするのが良いと思う。その関連で、商工会では情報提供やご挨拶などの段取り面のサポートが可能。
- ・ただし、商店街事業者へのお願いについては、まちなかでのイベントでないと難しいだろう。郊外の名所に関連するクイズラリーを開催する場合には、まちなかの人々へメリットを感じてもらいにくいからである。

これらのアドバイスをもとに、その後もゼミでは協賛金に関する相談を行い、栃尾地域において協賛金へのご協力依頼の活動を進めることにした。

9月15日には、より具体的なご依頼手順などのご相談のために、4年小林がにぎわい班の代表とともに栃尾商工会を再び訪問して、事務局長武士侯様ととちおにぎわい委員会の広野様からお話を伺うことができた。

にぎわい委員会の広野様からは、クイズラリーの購入物品について栃尾支所の補助金も活用可能であることをお教えいただいた。過去の「雁木あいぼ」では栃尾支所から地域振興に関する補助金を受給されており、それが今回も活用可能とお話だった。購入する物にもよるが、賞品類も含めて合計金額で10万円程度は可能だろう、とお話し下さった。

〔図表 18〕 栃尾商工会での打ち合わせ（2021/9/15）



武士侯様からは、以前にもお話しいただいた栃尾ライオンズクラブ様と栃尾ロータリークラブ様への協賛のお願いについて、あらためてお話しただけました。後日、協賛依頼をする具体的な調整について連絡いただけることになった。

5.2 賞品・参加賞などの物品について

続いて、広野様から、過去の「雁木あいぼ」の参加者数の実績をお聞きし、それに関連して参加賞をどのくらいの数用意すればよいか、その購入資金はいくらくらい必要になるかについて、大変参考になる情報をいただきました。

広野様のお考えでは、今回 10/23・24 にクイズラリーを開催するとして、参加者は 500 人程度見込めるだろうとのお話だった。それを受けて、私たちは 10/23・24 の両日について 1 日当たり 250 人程度の参加賞と配布プログラムを準備することに決定した。

他方で、成績上位者に進呈する賞品については、あまり豪華すぎる品は補助金対象になりにくいことから、1 人当たり 1,000 円程度が適当だろうとのアドバイスだった。加えて、栃尾の産物の PR につながる物品が望ましく、具体案として「あぶらげんしん」関連グッズ、てまり、丸鯛（菓子）、栃尾産のお米などを提案していただいた。

さらに武士侯様は、参加者への賞品の引き渡し方法もアドバイス下さった。当初、私たちは受付で配布するクイズラリー解答用紙に参加者の住所をご記入いただき、賞品は後日郵送しようとして計画していた。しかし、それにはかなりの手間と費用がかかってしまう。

それに対して、イベント当日に参加者がクイズラリー終了後に受付テントに戻ってきて採点した後に、満点の人はすぐ抽選を行い、その場で賞品を渡してはどうかという案をいただいた。この方法なら、大きくコストカットできるうえ、抽選の様子などで受付テントの見栄えも賑やかになって集客効果も期待できる。

ゼミで相談した結果、このアイデアを採用させていただくことにした。なお、栃尾商工会には抽選器のガラポンと当選時に鳴らすハンドベルがあり、それを使えば良いと提案いただき、イベント当日に貸していただけることになった。

このように、今年度は「とちお歩く旅のまちづくり委員会」との共同開催になることで、上記のとおり栃尾支所の補助金も活用できるようになり、その活用方法についても詳細の助言をいただくことができた。とりわけ、この 9/15 のヒアリングは、今後のイベント準備


を進める上で重要なポイントを明確にでき、非常に充実した打ち合わせとなった。

5.3 協賛依頼のためのスピーチ

商工会の武士侯様のご尽力によって、協賛金のお願いのためのスピーチのために、10月5日に栃尾ライオンズクラブ様、翌10月6日に栃尾ロータリークラブ様の各定例会においてお時間をいただくことができた。協賛ご依頼状と領収書を作成し、自分たちの活動がわかりやすく伝わるように準備した。

いただいた時間が最大5分間と非常に限られた状況で、自己紹介、ゼミ全体の説明、今回の取り組み内容とその事業規模の見通し、そして資金提供のお願い、これら全てを伝える必要があった。初めての経験のため慣れない緊張感があったが、私たちが地域活性化のために貢献したいという強い熱意をお伝えできるように心がけた。4年小林がゼミ全体を代表してプレゼンテーションを実施した。

〔図表 19〕 協賛金の依頼状（にぎわい班と共同で）

令和3年10月	
各位	長岡大学石川ゼミナール（3・4年）
栃尾活性化イベント事業への協賛金のお願い	
拝啓 時下ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。平素は栃尾地区の地域活性化に向けたゼミナール活動につきまして、格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。	
私たち長岡大学石川ゼミナール3・4年の学生一同は、一昨年度以来、栃尾地区の活性化に向けたプロジェクトに取り組んでおります。今年度は、下記2つのイベント実施にむけて活動を進めてまいりました。	
<p>①谷内通りで謎解きウォーク～雁木あいぼ（10/23-24 開催：とちお歩く旅のまちづくり委員会との共催）</p> <p>②栃尾織維と長岡錦鯉による空間芸術の展示～布の森（10/23-31 開催）</p>	
これらのイベントより、栃尾のにぎわい創出および域内外への魅力発信を推進し、究極的に栃尾の交流人口増加につなげていきたいと考えています（イベント詳細については本紙裏面をご覧ください）。	
誠に恐縮ではございますが、栃尾地区を活性化したいと願う私たちの趣意をご理解いただき、ご協賛を賜りたく、ここにお願いを申し上げます。誠にありがとうございます。	
ご協賛の内容につきましては下記のとおりです。なにとぞよろしくお願い申し上げます。	
敬具	
記	
1. 協賛金額	一口三千円 協賛いただいた皆様のお名前（事業者名・店舗名等）を、イベント・プログラムに掲載いたします。
2. 協賛募集期間	令和3年10月31日（日）まで
3. 納入方法	現金払い（その他のお支払い方法については別途ご相談ください）
4. お問い合わせ先	長岡大学石川ゼミナール研究室 代表： 4年 小林真由香、永田藍美（担当教員：石川英樹） TEL： 0258-39-1907 〒940-0828 長岡市御1町80-8
《Instagram》フォローしていただけますと大変助かります	
①谷内通りで謎解きウォーク	②布の森
	
TOCHIO_MORIACETAI	NUNONOMORI
以上	

その結果として、両団体からゼミ全体に対して、4万円（両団体から2万円ずつ）の協賛金をいただくことができた。さらに後日、ゼミのアドバイザー加治様もゼミ全体に1万円の協賛金を提供下さった。

〔図表 20〕 栃尾ライオンズクラブ様の定例会でのスピーチ



5.4 クイズラリー賞品の協賛依頼

クイズ全問正解者に対する賞品については、イベントの目玉でもあり、ある程度豪華な品物が良いのではないかという意見がゼミで多く出た。しかし、栃尾支所からいただける公的な補助金では、高価なものが購入できないという制約があった。

そこで、どうにか予算以内で目玉商品を調達できないかと考えた結果、栃尾の事業者の方々に対する賞品そのものご提供依頼にも取り組んでみようということになった。前述のとおり武士侯様、広野様からのアドバイスもあり、栃尾産の新米をクイズラリーの目玉の賞品とするのはどうかということに話がまとまった。

栃尾西谷産のコシヒカリは、強い甘みが特徴で、その品質の高さから高値で取引されている名品である。そこに着目した私たちは、10月4日に米与米穀店様を訪問し、イベントにご協力いただけないかご相談することにした。当初は値引きしていただければありがたいという程度に期待していたが、イベントを通して地域資源をアピールし、栃尾を盛り上げたいという思いをお伝えした結果、「栃尾西谷産棚田天水米コシヒカリ5kg」2袋をなんと無償でご提供いただくことができた。

私たちが本気で栃尾に貢献したいと考えていることをきちんとお伝えできれば、地域の方々はその受け入れて下さると感じられ、自信につながる出来事であった。

（執筆担当）鈴木 颯太

〔図表 21〕 米与米穀店様ご提供の新米



6. 広報活動

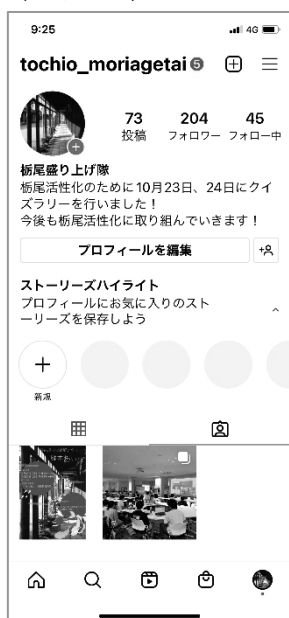
今年度の私たちの活動で中心となったのは SNS（インスタグラム）のフォロワー獲得活動である。その獲得のきっかけとして開催されるのがクイズラリーである。その点でクイズラリーそのものの広報も重要な活動の柱だった。インスタグラムの最大限の活用は当然として、それ以外にもポスターの作成、特設ウェブサイトの整備などにも取り組んだ。

6.1 インスタグラムの広報の目標設定～フォロワー数 500

今年度の広報活動で最大のポイントだったのがインスタグラムでの PR 活動である。そのフォロワー獲得自身が今年度の中心的なテーマだったからである。

私たちには既に昨年度作成したアカウントがあった。フォトコンテストの PR で立ち上げたものである。それを「栃尾盛り上げ隊」というアカウント名に修正して運営に取り組んだ（栃尾盛り上げ隊 @tochio_moriagetai：図表 22 参照）。

〔図表 22〕「TOCHIO_MORIAGETAI」



〔図表 23〕キャンペーンの実施



私たちはフォロワー数で目標値を定めて、目標管理の意識を高めた。その目標数値は以下の考察によって 500 とした。

まず、今後の栃尾 PR 情報拡散の視点からフォロワーのメイン・ターゲットとして 30～50 歳台の人々を想定した。その年代の人々は、比較的地域の活性化に関心を持ってもらえる可能性が高いと思われるからである。総務省人口動態のデータによると、現在の栃尾地区の 30～59 歳人口は約 5,000 人である。マーケティング等で活用される「クリティカルマス」の考え方を応用して、この 5,000 人の一割程度に広められれば、一層の拡散が期待できると考えた。「クリティカルマス」とは、情報伝達などが一定の割合に達すればその後は伝達が加速していく、その分岐点として最低限必要な規模を意味している。SNS の情報拡散に向けたクリティカルマスとなるシェアを 10% と想定したわけである。

こうして、私たちは「栃尾盛り上げ隊」のインスタグラムのフォロワー数を 500 まで拡

大することを目標に、その運営を進めることになった。

6.2 インスタグラムの更新

上記の目標までフォロワーを増やすには、そのアカウントの魅力を高めなくてはならない。たくさんの方々に見ていただき、興味を持ってもらい、フォローしていただけるよう、工夫をしながらインスタグラム活動を進める必要があった。

最も重要なのは高い更新頻度である。昨年度はアカウントを作ったものの、更新頻度が低かったため、フォロワーも伸びなかった。その反省を生かし、必ず週に3回は更新をすることを決めた。ゼミ時間中の様子や、フィールドワークの様子の写真を投稿し、今現在どのような活動をしているのかを投稿した。イベント開催日が近くなるにつれて、更新頻度もさらに高めていくことを目指し、ほぼ毎日更新するよう心掛けた。

当初は、PR班の中の広報係3人のみによる更新だったが、更新頻度を一層高める体制にするためにPR班全員が協力する必要があると考えて、各ゼミメンバーの投稿担当の曜日を指定して、投稿を進めることにした。投稿のためのコンテンツが無く困ったときには、昨年度のフォトコンの応募作品を紹介する内容で投稿した。また、毎回の更新時に、投稿コメントの最後にハッシュタグ機能を利用し、より多くの人に投稿を見つけてもらい、注目してもらえよう努めた。

クイズラリー開催の当日には、クイズパネル、解答用紙、看板にQRコードを付けて、PRすることにした。QRコードのついた手持ちパネルを持ち、谷内通りを巡回してクイズラリーの呼び込みに加えてインスタグラムのフォローもPRする計画を立てた。

フォロワーの数は毎日確認したが、当初はなかなか伸びなかった。そこで、10月に入りイベントも差し迫ったところで、キャンペーンを実施することにした。フォロワーから抽選で10名様に栃尾の銘菓をプレゼントするという「フォローで商品もらえちゃう!？」企画である。抽選は12月7日のゼミ時間中に行い、見事当選された方には、インスタグラムのダイレクトメール機能を使ってお知らせすることにした(図表23参照)。

6.3 栃尾タイムス様のご支援

私たちは、より一層の広報等のアドバイスをいただくために、栃尾を本拠地とされる報道機関である栃尾タイムス様にご相談した。栃尾タイムス様は、昨年度のフォトコンテスト開催においてもイベントのお知らせや入賞作品の掲載などで多大なご協力をしてくださっている。

栃尾タイムスの渋谷様に今年度の私たちの取り組みをご紹介したところ、クイズラリー開催とインスタグラム「栃尾盛り上げ隊」のフォロワー獲得の活動について、紙面で取り上げて下さった。SNSの認知度拡大を目指す私たちにとって、大変ありがたいご協力だった。引き続き活動を盛り上げていかなければならないと感じた。

〔図表 24〕 栃尾タイムス様に掲載いただいた私たちの取り組み（2021/9/25）



6.4 特設ウェブサイトの制作

6.4.1 特設ウェブサイト制作概要

さらに私たちは、SNS とイベントとを融合し、栃尾の素晴らしさを一層伝えるための特設ウェブサイト（URL <https://www.tochio-moriagetai.com/>）を作成した。協賛金等を活用し有料版 WIX を使って作成することにし、その作成作業は4年松永が担当した。

まず基本設計をどのようにすべきか検討すべきだったが、そのポイントなどについて、大竹アドバイザーがご指導下さった。大竹様オフィスで実際に WIX を使いながらウェブ設計の基礎についてお教えいただいた。9月から作成を開始し、10月のイベント前に大枠を完成し公表できた。

〔図表 25〕 特設ウェブサイトの設計を大竹アドバイザーにご指導いただく



完成したホームページは、PC だけではなくスマホでの閲覧にも対応させた。トップ画面に掲示板、栃尾の概要、インスタグラムとの連携をデザインし、ウェブサイトからでもインスタグラムの投稿が見られるように設定した。掲示板には、予定されているイベント等の日程や場所が一目でわかるように工夫した。

イベント情報のページも用意して、過去にどのようなイベント、企画を行ったか、これからどのようなイベント、企画を予定しているかを見ていただけるようにした。来年度以降にも栃尾地区で開催するイベントや企画が決まり次第、更新していく予定である。

6.4.2 昨年度のフォトコン作品を活用したバーチャルツアー

このウェブサイトの一の目玉はフォトギャラリーのページである。このページには、昨年度にゼミで実施した「栃尾市街地フォトコンテスト 2020」で応募いただいた作品を掲載した。

〔図表 26〕 フォトギャラリーページ（スマホ版表示）



ウェブ上でそれらの各写真をクリックすると、撮影された場所が表示される。さらにその表示下のリンクをクリックするとその地点がマークされた状態で Google マップが示されるという設計にした。バーチャルツアーが楽しめるという仕組みである。写真上の矢印をクリックすることで次の写真が表示されるようにした。（図表 26 参照）。

このサイトでは、実際に栃尾に行かなくても行ったような感覚になれる。また、栃尾の魅力をもっと味わうために実際に現地に行ってみたいと思ってもらえるのではないか。

このウェブサイトはまだ公開して半年足らずで、ウェブサイトの PR がなかなかできていない。他のメジャーなウェブとのリンクも実現できていない。閲覧数も少なく、知名度は低い。来年度以降も引き続きこのウェブサイトの一層の充実にあわせて、その PR も行っていく必要がある。このウェブサイトは、これからも私たちの活動や栃尾地区の魅力を伝える大きな発信手段に成長させていきたいと考える。

6.5 ポスターの作成

私たちはクイズラリーのポスターも作成し、大学内と栃尾文化センターに掲示していただいた。そこには SNS のインスタグラムの QR コードも掲載して、イベントとあわせてインスタグラムフォロワー獲得も意図したポスターを作成した。

〔図表 27〕 作成したポスター



(執筆担当) 松永 優芽

7. イベント直前の準備作業

7.1 イベント内容の詰めと準備作業を急ぐ

クイズラリーの開催日が近づくにつれて、企画と準備作業の遅れにより私たちは次第に焦りを募らせた。特に賞品案やチェックポイント検討、クイズ作成がなかなか進まず苦悩した。また、参加賞は参加者全員に渡すのか、賞品はクイズ全問正解者に渡すのか抽選にするのかといった詳細もほとんど決まらないまま10月を迎えた。クイズ作成においても、これまでのフィールドワークなどである程度の案は揃っていたが、最終調整として、難易度や内容の示し方をどうしたら良いのか方針が決まらないままだったため、詳細を詰めきれないでいた。

このうち参加賞と賞品については、ヒアリングにおいて、どのようなものを用意してPRすればクイズラリーの参加者増加にプラスになるかアドバイスいただいていた。栃尾高校生とも話し合っていた。しかし、それらのアイデアをもとに私たちは確定できないでいた。「商品券」や「酒」、「米」や「あぶらげ」などの案も出たが、「商品券」購入には補助金が活用できず、「酒」は参加者が未成年だった場合にするのか等の問題がある。それらをきちんと整理して考えなければならなかった。

そうした状況下、大竹アドバイザーからは、企画の確定には残り時間も頭に入れた上でしっかりと優先順位をつけるべきだというアドバイスをいただいた。そのご指導の下、私たちはまずは賞品・参加賞を決めることにした。その購入の手配には時間がかかり、ものによっては調達が開催日に間に合わないことが心配されたからである。

7.2 賞品・参加賞の決定と調達

まず検討したのは目玉になる賞品である。賞品購入の資金は協賛や補助金に頼る必要があった。その限られた資金でクイズラリーを盛り上げるためには、いくつかの目玉景品を用意した方が良く考えたのである。ゼミで相談した結果、最終的に栃尾名産の「米」「醤油」「甘酒」を目玉景品として準備することにした。

このうちお米について、当日の賞品陳列による見栄えを意識して、最低5kg以上の量のお米が必要だと考えた。それに対して、補助金の活用ではあまり豪華な品の購入は不適切だにご指導いただき1,000円程度までに抑える必要があったことから、お米の購入は難しかった。お米は断念せざるを得ないかと落胆していたところ、先述のとおり、米与米穀店様に協賛品として「栃尾産の米」をご提供いただき乗りきることができた。

それに「醤油」「甘酒」も加えて、クイズの全問正解者にその場でガラポン抽選を行ってもらい、米与米穀店様の「米」を一等賞、栃尾産「醤油」「甘酒」を二等・三等の賞品とした。また、ハズレの参加者にも全員に参加賞として缶飲料を用意することにした。

醤油、甘酒、缶飲料を購入する上で、補助金の活用が可能かどうかについては、事前にとちお歩く旅のまちづくり委員会の西片様にご連絡して、さらに予算面を統括されているとちおにぎわい委員会の広野様に確認いただいた。その上で、補助金を管理しておられる長岡市栃尾支所商工観光課の山井様にご連絡して購入計画をチェックいただき、購入作業に移った。

〔図表 28〕量販店で缶飲料 500 本を購入



特に参加賞となる缶飲料は500人分を用意することにしたため、イベントに間に合うかどうか心配されたが、4年松永を中心に量販店をあたり、ディスカウントで無事購入できた。その置き場所には、大学に相談して3号館のお部屋を一時的にお借りできた。

醤油、甘酒については、3年鈴木が担当した。醤油（1,000ml）16本、甘酒（740ml）10本を購入することにして、道の駅 R290 とちおで無事購入できた。これらは、一等賞のお米と一緒に、クイズラリー当日に受付テントで目立つように陳列することにした。

〔図表 29〕 用意した目玉賞品をクイズラリー当日に受付テントでPR



7.3 クイズと実施要領の詰め

クイズの最終調整として、ほとんどの参加者が全問正解しガラポン抽選してもらえるように、難易度は比較的簡単にする方向性で決まった。クイズ案は私たちが考えたクイズ案をもとに栃尾高校生とも話し合い、候補案から良いと思ったものを選ぶとともに、新しいクイズ案を加えて決定した。また、これまでのご経験をお教えいただくためにも、とちお歩く旅のまちづくり委員会の西片様にも数問ご提供いただけることになった。

〔図表 30〕 プログラム兼解答用紙（表・裏）

とちお歩く旅のまちづくり委員会 × 長岡大学
谷内通り謎解きウォーク〜雁木あいぼ〜

クイズラリー解答欄

- ①
- ②
- ③
- ④
- ⑤

Instagram QRコード
7x0-が読みとれます!

フォローから抽選で10名様に栃尾銘菓をプレゼント! (抽選12月)

※ 新型コロナウイルス感染拡大防止の対応のために以下にお名前・ご連絡先をご記入下さい、ご協力よろしくお願い致します。

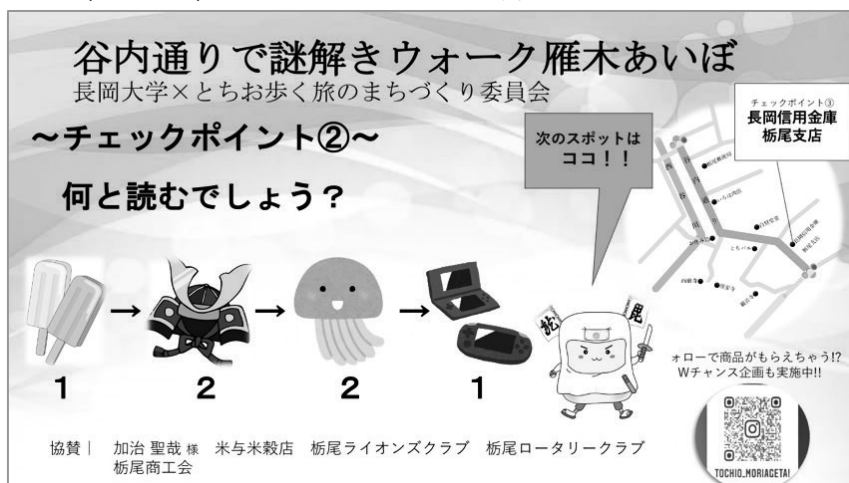
□ お名前: _____

□ ご連絡先: _____

□ ご参加いただいた感想をお願いします!

※ ご記入いただいた個人情報は、新型コロナウイルス感染拡大防止の対応以外に利用することはありません。

〔図表 31〕 チェックポイントに掲示するクイズパネル



クイズが確定でき、続いて必要だったのは、①参加者に受付でお渡しするクイズ解答用紙兼プログラム、②チェックポイントに掲示するパネル、の作成である。

このうちクイズ解答用紙兼プログラムについては 3 年今井が担当した。「ルール説明」「解答記入欄」「チェックポイント・エリアのマップ」「協賛者のご紹介」「SNS のフォロー依頼」のすべてを、デザインを考えながら 1 枚の紙に収める必要があり、簡潔にレイアウトするのは容易ではなかった。

各チェックポイントに掲示するクイズパネルの作成は 3 年諸橋が担当した。後述のとおり設定した 7 カ所のチェックポイントに、それぞれ掲示するクイズパネルを作成せねばならなかった。場所ごとにクイズ内容と次のチェックポイント告知が違うため、すべて異なるパネルになり、7 枚別々に作成する必要があった。

クイズラリー参加者は、小さな子どもからお年寄りまで多様である。誰にも見やすいものにするために、レイアウトやデザインには苦心した。加えて、クイズラリーに協賛下さった皆様の PR とともにインスタグラムの QR コードも掲載したかった。試行錯誤により、7 枚のパネルを完成できた。大学の装置をお借りして 7 枚すべてにラミネート加工を施し、雨などで濡れても破損しないようにした。

7.4 「あぶらげんしん」の使用を許可いただく

私たちは、上記のプログラム、クイズパネル、さらに当日の看板に、栃尾のイメージキャラクターである「あぶらげんしん」を活用したいと考えた。「あぶらげんしん」は栃尾商工会が全国からアイデアを募集して決定された地域のキャラクターである。その利用に関する権利等は栃尾商工会が管理されている。

商工会の事務局の方にご相談して、その利用に関する申請を行うことにした。通常は利用に伴って「デザイン使用料」を支払う必要があるが、地域振興のための大学ゼミ活動による非商用であることから年内の

〔図表 32〕 「あぶらげんしん」(栃尾商工会ご提供画像)



活用に関して使用料支払いを免除いただけた。正式な「『あぶらけんしん』デザイン使用(変更)許諾通知書」とともに、「あぶらげんしん」の様々な画像電子データを大学にお送りいただき、私たちは以上のような活動において活用させていただくことができた。

7.5 チェックポイントの設定

チェックポイントについては、7月に現地視察の結果をもとにゼミ内で相談して、栃尾の魅力が伝わるよう名所や歴史的な場所をいったん選んでいた。しかし、その後に、候補に決めたチェックポイントをあらためてまわってみると、スポット間の距離が遠すぎて、駐車場の問題などが生じることが分かり、再考することとなった。

その後もなかなか決まらない中、7月末に「栃尾縁日」のお話をいただいた。「栃尾縁日」が谷内通りで行われるイベントであったため、全チェックポイントを谷内通り周辺に設定する必要が出てきた。さらに、多様なクイズラリー参加者に分かりやすく、また効率よくまわってもらえるよう工夫し、谷内通りを中心に全7ヶ所を最終決定した。

〔図表 33〕 チェックポイント一覧

いろは肉店	白昼堂々	観音寺
常安寺	西巖寺	信用金庫 栃尾支店
お休み処		

初日は夕方からのイベント開始なのに対して、二日目は午前からの開始としていたことから、初日のチェックポイント数は5カ所、二日目は7カ所として、開催時間が長い二日目にはより多くのチェックポイントをまわってもらうことにした。それにあわせて両日で配布する解答用紙・プログラムの内容を微修正して変えた。

チェックポイントでは、クイズパネルの設置スペースとともに、夜9時までの開催であることからパネルを照らすライトが必要だった。そのため、ライトのための電気を借り、敷地内に参加者が集うことへの許可をいただかないとならなかった。10月に入って、私たちは分担して上記の7カ所をまわり、所有者の方を訪問し場所ご提供や電気使用のお願いをした。無事皆様から快諾していただけた。私たちのクイズラリー企画の成功を応援するありがたいお言葉までいただけた。

なお、ライトについては、自分たちでハンドライトを用意し、大学からスタンド付きの照明器具とコンセントのドラムをお貸しいただけることになった。また、イベント当日には、トチオノアカリ協議会様から LED ランプを数個、私たちの受付テント前の照明としてお貸しいただいた。テントの雰囲気が大いに改善されることとなった。

7.6 会場準備

会場では、栃尾縁日に出店する他の団体の方々が大勢おられて、各々のスペースについて栃尾縁日の事務局の方から指定され、それまでの全体打ち合わせにおいて私たちの場所についても連絡いただいていた。私たちクイズラリー班はメイン会場として歩行者天国となる谷内通りにおいて、一番端の方に近い場所だった(栃尾郵便局前)。そこで、遠くからでもクイズラリーの受付の場所だと目立つように、大きなプラカードの看板を用意した。

看板の必要性は広野様のご提案で、毎年の雁木あいぼにおいても作成されていたとのことだった。そこで、私たちも協賛金と補助金を利用して材料を用意し、一から手作りにより作成した

会場全体でイベントとQRコードをPRするためのプラカードの看板も作成した。注目してもらえるようにパーティーモールで装飾し、イベント概要や目玉賞品のアピールにより大勢の参加を狙った。パネルの図を作成してハレパネに貼り付けて、それを棒に設置して完成させた。この作成では、加治アドバイザーがご協力下さった。

〔図表 34〕「栃尾縁日」プログラムのイベントマップ（記号Eがクイズラリー）：



イベント開始直前の会場準備において、最後にクイズパネルの設置作業に苦心した。チェックポイント内で「参加者が見つけやすい場所」で「ライトと一緒に設置できる場所」は限られてくるからである。上手くライトで照らせるよう、ハンドライトを紐で柱にぶら下げたり、スタンド付きのライトは角度を調整したりなど、様々な試行錯誤をした。最終的には、夜間でも参加者にクイズパネルを見つけて読んでいただくのに、最低限支障がない状況にはできたと思う。

(執筆担当) 諸橋 涼

8. イベント当日の様子・取り組み

8.1 来場者の様子、分担について

8.1.1 イベント運営の体制

イベントへの準備を万端に済ませて、いよいよイベント当日の10月23日(土)、24日(日)を迎えた。今回のイベントは、前述のとおり「栃尾縁日」という栃尾地域で例年行われている様々なお祭りの合体による祭典に組み込んでもらう形での開催だった。そのため、10月23日の朝、イベントで割り振られていた区割りにブースを設営してイベント準備を進めていった。

〔図表 35〕 栃尾縁日の各イベントのスケジュール表～栃尾縁日打ち合わせ資料

とちお縁日タイムスケジュール			
団体名	イベント名称	会場	時間
	谷内通り通行止め		23日(土)15:00～ 24日(日)23:00
トチオノアカリ協議会	とちお縁日present 栃尾市民会館音楽フェス ～コロナウイルスに負けるな！頑張ろう！頑張ろうね！音楽の力で～	市民会館大ホール	23日(土)15:30～18:00 ※受付14:00開始
商工会(にぎわい委員会)	飲食マルシェ&野外ライブ	にぎわい広場 谷内通り	23日(土)17:00～21:00 (音楽 18:00～20:00) 24日(日)10:00～20:00
とちお歩く旅のまちづくり委員会 長岡大学	谷内通り歴史きウォーク～雁木あいぼ～	谷内通り	23日(土)17:00～21:00 24日(日)13:00～20:00
トチオノアカリ協議会	トチオノアカリ 「コロナウイルスに負けるな！頑張ろう！頑張ろうね！！」	谷内通りほか	23日(土)17:30～21:00 24日(日)17:30～20:00
栃尾青年会議所	ありがとう中央公園 For the Good Time@常安寺	常安寺	23日(土)10:00～16:00 24日(日)10:00～15:00
栃尾てまりの会	栃尾てまり祭	常安寺	23日(土)10:00～16:00 24日(日)10:00～15:00
栃尾高校	栃尾高校展示・販売 「思いやりランブ」	谷内通り	23日(土)16:00～18:00 24日(日)16:00～18:00
栃尾謙信公奉賛会	第54回 栃尾謙信公祭 長尾景虎、秋の陣	とちノバル にぎわい広場	24日(日)10:00～14:00
長岡大学	布の森～繻綉を泳ぐ繻綉～	谷内通り 白鷺堂々	23日(土)13:00～20:00 24日(日)13:00～20:00
栃尾市場組合	24日定額露店(同時開催)	金町・支所前通り	24日(日)8:00～14:00

8.1.2 イベントでの作業分担について

私たちは事前に、2日間のイベント運営の作業分担を協議し、シフトを組んだ。シフト編成にあたっては、各個人が効率よく作業できるよう配慮した。

準備・片付け作業としては、受付場所の設営と撤去が大きな作業だった。事前に栃尾縁日の事務局にレンタルを申し込んでおいたテントを組み立てて設営し、机と椅子を配置して抽選場所の準備を進める作業がある。とちお歩く旅のまちづくり委員会の西片様もサポートして下さった。

クイズのチェックポイントの設置・管理については、パネルの設置に加えてパネルを照らすライトの設置と撤去作業がある。夜間も含むイベントのために必須だった。「栃尾縁日」の目玉の企画の一つ「トチオノアカリ」のための演出として、商店街の街灯や照明などが

すべて消灯されるという特殊事情があった。夜間には、すべてのチェックポイントに照明を置かなければ、参加者は暗くてパネルを全く読めない。ライトの設置は大切な業務であり、人員を多く投入した。

〔図表 36〕 初日のメンバーの役割分担シフト表

23日	準備		イベント				撤去
	15時	16時	17時	18時	19時	20時	
小林真由香		クイズ設置	受付	ブラカード	丸付け	ブラカード	クイズ撤去
松永優芽		クイズ設置	受付	ブラカード	丸付け	ブラカード	クイズ撤去
竹内葵		受付場所設営	丸付け	ブラカード	受付	ブラカード	受付片付け
阿部紘輝		受付場所設営	丸付け	ブラカード	受付	ブラカード	受付片付け
諸橋涼		受付場所設営	ブラカード	受付	ブラカード	丸付け	受付片付け
王浩田		ライト設置	ブラカード	受付	ブラカード	丸付け	ライト撤去
鈴木颯太		ライト設置	ブラカード	丸付け	ブラカード	受付	ライト撤去
今井諒		ライト設置	ブラカード	丸付け	ブラカード	受付	ライト撤去

〔図表 37〕 受付テントの設営作業と完成した様子（イベント初日）



受付テントでは、クイズラリーの案内や賞品と参加賞の引き渡しなどの業務があった。クイズラリーを終えた参加者は採点のために受付に戻ってきていただく流れになっていたため、その対応として採点するスタッフも必要だった。

さらに、ブラカードでイベントとインスタグラムを PR する人員には、栃尾縁日のメイン会場の谷内通り全体を PR パネルを掲げて巡回し営業活動を行うという業務があった。

こうした内容を踏まえて編成したシフトでは、1 時間周期での役割交代を行うことにした。2 日間を通してこのシフト表は適切に機能し、役割のすれ違いやいわゆる「シフトミス」といったミスマッチ等は起きなかった。

8.1.3 イベント初日の様子

以上の準備のもと、イベントは開始された。初日には、谷内通りを会場とする多くのイベント開始が夕方で、私たちのクイズラリーも 17 時～21 時と夕方から夜にかけての開催だった。

〔図表 38〕 栃尾縁日の来場者で賑わう^{やち}谷内通り



1日目は、谷内通りに大勢の方々が来られた。谷内通りは交通規制で歩行者天国とされ、道路にはテーブルと椅子が置かれてフードコートになり多くの飲食店も出店し、大いに賑わっていた。その中から、クイズラリーにも家族連れや友達同士のグループなど大勢の方々が開始当初から参加して下さった。テントではクイズ終了後の採点や賞品抽選が混雑して、行列になってしまったほどである。翌日が日曜と休日で栃尾縁日への来場者自体が多く、通りの屋台などで食事などを済ませてきた人たちが気軽に立ち寄って下さったようだ。また、ガラポンでの抽選によって、子どもたちの興味をひいてそのご家族を巻き込むことができたことも、大勢の参加者につながったと考えられる。

上述のとおり、私たちは、両日の参加者数をそれぞれ250名ずつの合計500名という見通しを立てて準備していた。しかし、開始後2時間半ほどで参加者数は200名に迫り、3時間ほどで250名に達する勢いとなった。

そのため、250名分しか用意していなかった初日用解答用紙（兼プログラム）が不足するという事態になった。急ぎよ2日目の解答用紙を流用することにした。2日目は初日とは異なるチェックポイントで印刷内容が少し異なっていたが、何とか活用できた。

こうした混雑によって、今年度私たちにとって最も重要な取り組みだったはずのInstagramのフォローのお願いがほとんどできなかった。当初の計画では、参加者のクイズ採点後に参加賞や賞品をお渡しする際にQRコードを使いフォローしてもらおう予定だった。混雑により多くの人をお待たせした中で、それどころではなかったのである。大きな誤算だった。

今回は栃尾縁日という栃尾でも初めての大きな祭典のなかでのイベント実施であり、そうした外的要因を見越した予想が難しかった。あらゆる可能性を踏まえて余裕を持たせた準備の必要性を学んだ。とはいえ、イベント参加者数について、予想を上回った実績を得た点に関しては取り組みの成果として受けとめたい。

1日目の参加者は合計258名となった。

〔図表 39〕 初日のクイズラリーのテント～採点コーナーが混雑！



8.1.4 二日目の様子

1日目の大盛況の余韻が残る中、クイズラリーは2日目を迎えた。2日目は、10時～20時と1日目よりも長時間の開催予定だった。その分、参加者にまわってもらうチェックポイントの数を多く設定した。私たちは1日目と同様に朝からテントでの準備を進めた。

2日目は1日目よりも開催時間が長い。また前日の解答用紙不足の失敗に対する反省もあって、もともと250枚用意していた解答用紙を倍の500枚に増刷した。さらに、参加賞の缶飲料も足らなくなる心配があったので、前日夜に近隣の量販店で急ぎょ追加購入をしていた。そうして、万全の態勢でイベント2日目が始まった。

しかし、2日目は前日に比べて「栃尾縁日」そのものへの来場者が少なかった。そのためクイズラリーの参加者も昼過ぎまでなかなか増えず、午前10時の開始からお昼頃までの参加者数は30人程度だった。前日の盛況ぶりからして、少し拍子抜けだった。それでも日が傾いた16時ころから次第に参加者が増えはじめ、18時過ぎに参加者数はピークとなった。18時前後だけで100人程度の参加があった。

最終的には1日目ほどの勢いにはならず、2日目の参加者数は185人となった。

〔図表 40〕 クイズラリー二日目：参加者にメンバーが説明



8.2 クイズラリー中の広報活動

今回のクイズラリーでは、イベント PR だけではなく、Instagram「栃尾盛り上げ隊」の PR が重要だった。そもそも、そのフォロワーを増やすためにクイズラリーを開催したのである。

〔図表 41〕 パネルでクイズラリーと Instagram の PR (二日目)



二日間のイベント開催期間中、私たちはローテーション表に従って、4人が2つのパネルを交代で持ち合い、谷内通りの中を西端から東端まで巡回し、クイズラリーへの参加と Instagram のフォローを呼び掛けた。

通りを行き交う人たちに対して、メンバーはなるべく目に留まるようなアピールに努めた。しかし、振り返ると、この活動で Instagram フォロワーやクイズラリー参加の勧誘にはあまりつながらなかった。実際、クイズラリーの参加者に受付テントで話を聞いた時には「(巡回の) PR パネルを見てきました」といった声は聞かれなかった。さらに後述の通り、クイズラリー開催日のフォロワー数の上乗せはごくわずかだった。巡回時の声掛けにもっと積極性が必要だったと反省される。

来年度以降に同様の取り組みを続ける場合には、広報の方式について一層踏み込んだ検討が必要である。

8.3 NST 様の取材を受ける

今年度の私たちの活動は、TV 局の NST 様に取材していただくことができた。大学での授業光景と、2 日目のクイズラリー運営の様子や PR パネルを用いた営業活動の風景を取材いただいた。

〔図表 42〕 栃尾縁日での NST 様の撮影風景



その取材に対しては、今年度私たちが目指すクイズラリーと SNS を通じた「栃尾地域の活性化」についての考え方や熱意はしっかりと伝えることができたと思う。イベント当日に参加者がクイズラリーで谷内通りをまわり終わった時の達成感あふれる場面もお見せできた。

残念ながら、にぎわい班との同時取材であった関係上、11/9 の NST 様の放送の際には、PR 班の活動風景はあまり取り上げていただけなかった。それでも、TV 局に取材していただいたこと自体が非常に貴重な経験であり、今後再び取り上げていただく可能性も示せて、来年度以降に向けてモチベーションを高めることができた。

今後も、今年度同様に様々なメディアに取材していただけるよう、魅力ある企画を立案して、成功につなげていきたい。

8.4 クイズラリーを終えて

以上のとおり、クイズラリーについては大きなトラブルもなく、無事終えることができた。このイベントに絞って、得られた気づきを以下に整理した。

1 つ目はクイズの正解率が非常に高く、多くの参加者に喜んでいただくことができ、栃尾について広く知ってもらうことができたということである。クイズ作成において、私たちは栃尾の PR につながる作問を意識した。開催期間中に、栃尾地区外から来られた参加者がスマートフォンで調べながら解答される様子も多く見受けられた。参加者の方々の熱意に感銘を受けた。クイズラリーは、域外の人々に栃尾のことを知ってもらう機会になったのではないだろうか。またパズル的な要素も加えたクイズも用意したことで、栃尾の人々にも楽しんでいただけたと思う。

クイズラリー後の賞品獲得のためのガラポン抽選は、全問正解者のみ対象という条件を付け、全問正解者が少なかったらどうしようかという心配もあった。しかし、本番ではほとんどの方が全問正解され、たくさんの方々にガラポン抽選の「ワクワク感」をお届けすることができた。

2 つ目はこのイベントの参加者への受けが非常に良かったことである。ゼミ生がライトの照明の確認のためにチェックポイントを巡回していた際に、参加者の皆様がクイズへ真剣に取り組まれている様子を目の当たりにした。このクイズラリーを企画して本当に良かったと強く感じた。今回の活動は地域活性化に向けた一つのメソッドであるが、次年度以降もより良い形での地域活性化に貢献したい。

〔図表 43〕ゼミ活動の撮影で使用したジンバル



なお、今回の PR 班の活動はできるだけドキュメンタリー形式の動画として記録しておきたいと考えた。夏休み前から記録係を決めて、「ジンバル」という機器を使ってスマートフォンで活動状況を撮影し動画データを蓄積させてきた。大学での議論の様子やフィールドワーク、さらに栃尾縁日の様子も撮影し記録に残し、ゼミ内で共有した。そうして、12月4日の成果発表会で発表最後に放映したプロモーションビデオにつなげたのである。こうした記録は、今後のゼミ活動でも継続して欲しいと思う。

(執筆担当) 竹内 葵

9. 今後に向けた反省、振り返り

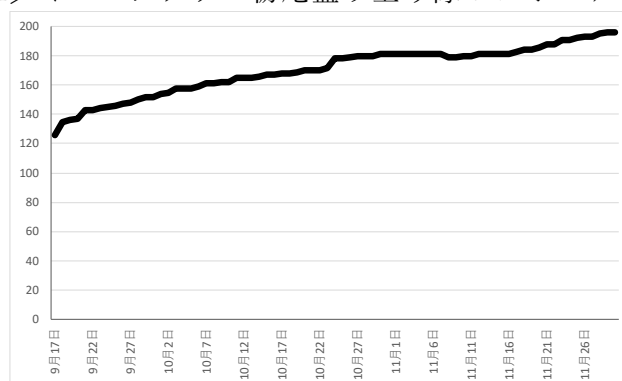
9.1 成果と反省点

私たちの究極的な目標は栃尾地区の交流人口増加による活性化である。今年度は、新型コロナウイルス収束後の取り組みの土台作りをにらんで、クイズラリーに決定した。また栃尾の魅力を伝える SNS やウェブサイトを活用して地域外に認知してもらおうと考えた。特にクイズラリーは SNS でのフォロワーの増加を一気に加速させるきっかけにできないか考えた。以上の取り組みについて以下で振り返る。

クイズラリーに限ると、10月23日、24日の二日間で444人の参加者を集めることができたのは大きな成果である。栃尾縁日における賑わいづくりに大いに寄与できたと考える。他方で、今年度のゼミ活動全体を振り返ると、反省点も多く残された。

反省点の1つ目は、インスタグラムで目標とした500名のフォロワーを獲得できなかったことである。フォロワー数の推移はグラフの通りである。12月時点で200程度にとどまり、目標値の500に遠く及ばなかった。特に、フォロワーを増やすために開催した10月23日・24日のクイズラリーにおいて、フォロワーをほとんど増やせていない。その点については前節で触れたとおりである。

〔図表 44〕 インスタグラム栃尾盛り上げ隊のフォロワー数の推移



クイズラリー以前を振り返ると、フォロワー数の目標値を設定した当初、インスタグラムの投稿頻度は週に1回程度と不十分で、フォロワーはなかなか増えなかった。増やすための基本は、高い頻度の投稿で絶えず話題を提供し続けることである。夏以降、ゼミ内でローテーションを組んで改善を試みた。また、各ゼミ生が身の回りの人には直接フォローを呼びかけた。そうして、徐々にフォロワーは伸び始めたが、上記の通りクイズラリーで

はほとんど増やせなかった。また、フォロワーへのプレゼントキャンペーンを実施したが、それによってどの程度増やせたかは、今後分析が必要である。最終的なフォロワー数は 200 人程度となった。

反省点の 2 つ目は、最終的な活動の方向性の決定が遅かったことである。年度の前半には、昨年度のフォトコンテストの応募写真を活用したフォトラリーの企画を話し合った。そうして栃尾でのフィールドワークは比較的早い時期に始まり、栃尾についてまだよく知らなかった 3 年が栃尾に接することができたことは良かった。しかし、フォトラリーの企画の詰めが遅れ、結局、夏休み前の時期にクイズラリーに変更されることになり、本格的なスタートが遅れる形になった。

3 つ目めの反省点は、ゼミナールの時間外の活用がうまくいかなかったことである。とくに春以降の前期において、毎週火曜日のゼミナール以外での時間がなかなか有効に活用できず、毎週のゼミ授業での相談と報告も効率が低下し、活動のペースは上がらなかった。

4 つ目は、SNS 以外での広報活動が不十分だった点である。今回のクイズラリーの PR で、主なターゲット層は子どもや家族連れだったが、そこへの PR がほとんどできなかった。教育委員会や小学校を通じてポスターやチラシを子どもたちに配布できていれば、より効果の高い広報ができたと考えられる。栃尾高校との高大連携でも、広報の検討により多くの時間を割くことが必要だったかもしれない。

9.2 来年度以降の活動について

今年度も新型コロナウイルスの影響で、一昨年度から目標とされたツアー開発を行うことはできなかった。とはいえ、谷内通りでの謎解きクイズラリーの開催により、多くの参加者に栃尾のことを知ってもらうきっかけ作りができた。これは、来年度以降のツアー開発関連の取り組みの土台づくりにつながったのではないだろうか。また、目標には届かなかったが、栃尾の活性化に向けたインスタグラムに対して 200 人にフォローしてもらうことができた。来年度の活動において情報発信ルートの一つとして活用できるだろう。こうした今年度の活動成果も踏まえて、ゼミ内で検討されたアイデアをもとに、来年度以降の具体的な取り組み案 2 つを以下に紹介したい。

(1) 雁木あいぼの第二弾

1 つ目のアイデアは、今年度に引き続いて、とちお歩く旅のまちづくり委員会様との雁木あいぼクイズラリー共催の第 2 弾である。

雁木あいぼは、その伝統により栃尾内では認知度が圧倒的に高い。栃尾の住民の皆さんは、小さい頃に雁木あいぼに参加した経験から懐かしいと感じて下さる。今年度、放映はされなかったが NST 様の取材も受けることができた。雁木あいぼの伝統と素晴らしさを一層アピールすることで、この活動が来年にテレビ番組での報道が可能かもしれない。そうして栃尾の知名度向上に寄与することで、栃尾の交流人口の増加につながればよいと考える。

(2) トチオノアカリ協議会様とのコラボ

トチオノアカリ協議会様との共同によるイベント開発である。今年度の「栃尾縁日」では「トチオノアカリ」も行われ、その協議会の方々に私たちの活動についてご認識いただける場にもなった。そうして栃尾縁日の打ち合わせにおいて、協議会様から来年度のコラボのお声がけもいただけたのである。

〔図表 45〕 栃尾縁日でのトチオノアカリのランプ（谷内通り）



「トチオノアカリ」は栃尾の繊維を活用して作られた LED のランプでまちをかざり、幻想的な空間を夜の栃尾に創り出すイベントである。コアなファンも多く、遠方から数千人もの参加者が栃尾へ見に来られる。そうしたトチオノアカリを大学生ならではのアイデアでパワーアップし、新たな価値創造による栃尾の魅力向上ができないだろうか。

いずれのアイデアも、一昨年度以来の究極的な目標であるツアー開発の実現に近づくための道になると思う。

9.3 終わりに～地域活動組織のデータベース化およびビジネスの視点

以上のアイデアに加えて、来年度は今年度に連携体制を深めることができた栃尾の地域おこし関連団体のデータベース構築にも取り組んでいきたい。私たちは、「栃尾縁日」での連携を通じて、栃尾の活性化に情熱を持って真剣に取り組まれている多くの団体、人々の存在を知った。その皆さんのエネルギーをこれまで以上に有機的に融合できれば、栃尾地区活性化のテンポが大いに加速されるのではないだろうか。今年度の「栃尾縁日」の成功はその可能性を示したと思われる。それには、各団体がどのような目的で、いつ、どのように活動しておられるかという情報を整理して、地域内外の方々と共有することが有意義である。そのデータベース化を私たちが推進し、栃尾活性化のネクサスとしての役割を担うのである。

さらには、ビジネス化も意識し資金面で持続可能な地域活動につなげていく体制作りにもチャレンジしたい。ビジネスプランを考える視点も加えてゼミ活動の一層の改善を図り、これまで以上に栃尾地区の活性化に寄与していきたい。

（執筆担当）今井 諒

長岡大学 学生による地域活性化プログラム 各プロジェクト報告書

1. 栃尾地区活性化に向けたにぎわい創出事業：にぎわい創出プロジェクト
～布の森 in 白屋堂堂～
石川英樹ゼミナール（1）
2. クイズラリー開催、SNS による栃尾PR
石川英樹ゼミナール（2）
3. 十分杯を世界に知らせよう！—動画制作を通して—
権 五景ゼミナール
4. きもの文化村構想の試み
～十日町地域における新たな可能性～
喬 雪氷ゼミナール
5. オープンファクトリーで長岡を活性化！
栗井英大ゼミナール
6. グラスルーツグローバル化～
—草の根・地域からの人類一体化の推進—
広田秀樹ゼミナール
7. 小学生のプログラミング教育を通じた地域活性化活動
高島幸成ゼミナール
8. 主体性を礎にした、ネットに頼らない情報の収集と課題の探索
武本隆行ゼミナール
9. デジタル・情報技術を活用した地域の財・サービスの情報発信
坂井一貴ゼミナール
10. コロナ禍における「まちの駅」の新たな交流・連携のあり方を考える
鯉江康正ゼミナール
11. 長岡市摂田屋の魅力を高め、観光客を増やし、地域活性化を図る
～イベントプロジェクト～
生島義英ゼミナール（1）
12. 長岡市摂田屋の魅力を高め、観光客を増やし、地域活性化を図る
～情報発信プロジェクト～
生島義英ゼミナール（2）

令和3年度 学生による地域活性化プログラム 石川英樹ゼミナール活動報告書

【発行日】 令和4年3月30日

【発行人】 村山 光博

【発行】 長岡大学

〒940-0828 新潟県長岡市御山町80-8

T E L 0258-39-1600（代）

F A X 0258-33-8792

<https://www.nagaokauniv.ac.jp/>